
EIN GLANZ

きはねせりな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E I N G L A N Z

【Nコード】

N 6 0 0 3 Z

【作者名】

きはねせりな

【あらすじ】

E I N G L A N Z 第一部ハイライト版です。おまけ程度に第二部と第三部の冒頭あらすじがつきます。

写本B版

第1部 序章

不思議な夢をみた…

愛する娘のこと

庭の中でエーデルワイスの花を愛でる娘の幼なじみのアルベル君

妻のテレゼと養子のユリアン

虹色の雪がグリーンアイスのような光彩を残してゆく…

「リーザ」とアルベル君が優しく呼びかける

我が夢……

皇帝ユリウス27世ハインリヒは人払いした執務室で目を覚ました。夢は甘美で現実の過酷さを和らげたが何を暗示していたかはわからなかった。

また、そのようなことにかまけている場合でもなかった。机の上の書類に金印を押すと宮廷医をたばねるフォーデルバイデ侯に親書を手渡すべく階段を降りていく。

起立してフォーデルバイデ侯の前に立つ武官に挨拶をすると、奥の部屋に待機していた壮年の侯爵が立ち上がる。

「おはようございます皇帝陛下」

「侯爵、この親書をサミディア王ラルスに渡して欲しい。
くれぐれも内密に頼む」

「畏まりました。本当にこれでよろしいですね？」

「……娘には安全な生活を与えてやりたい。
そのためならば、だ。」

「心得ました。しかし天帝猊下にはどうご説明致しましょう？
王子として育てるようにのたまわれておいででしょう」

「……国外に逃がすまでの偽装にはなるだろう。
気が進まないが致し方ないだろう……」

ハインリヒがフォーデルバイデ侯の目を見る。

「ではわたくしから猊下にご説明致します。

陛下はどうかこれ以上ご心配されぬよう……」

「孫を娘にしたと知れば激怒されよう。

私の…双子の方の息子もまだ見つからないからな。」

「陛下、これはご賢明な決断だと思えます。

どちらかの性におかねば殿下がおかわいそうです。

セドリク殿下が第三の性でお産まれになったので、猊下は天使だと
お喜びになられた。

ですが、将来、成長が身体に負担をかけます。
殿下の健やかなご成長こそがわたくしの望み、
一族ろうとう祖国のために身を捧げる所存でございます」

「選帝侯のそなたにとっては負担であろうに…世話をかけるがよろ
しく頼む」

皇帝ユリウス27世ハインリヒが頭を下げた。

「動乱はノルトラント王の機転でおさまりつつあります。陛下にも君主らしくしていただかねばなりません。」

皇帝陛下自ら頭を下げるなど今後はなさいませんように」

「……………そうか。まだ慣れぬのだ。まさか私が皇帝に選出されようとは10年前ならば考えもしなかったことだ」

「陛下ならばと先代ヴィルヘルム様も後のことを任されたのです。しっかりとないませ！」

「たとえ挫けそうでも、娘の幸せな未来のためならば私は頑張ることが出来るのだ。」

病床の父に代わり私が築いて見せよう」

「共和制再建！」

フォーデルバイデ侯は秘密の合い言葉で応えた。

新しい皇帝ユリウス27世の子は双子で産まれた。

最初に産まれたのが兄のレオンで、一緒にセドリック・エリーザベト・ギーゼルヘル皇太子も産まれてきた。

二番目の子供セドリックは第三の性で産まれた為、宮廷医長であるフォーデルバイデ侯は

どちらかの性別に決めるようにハインリヒに提案したのだった。

ハインリヒは思案の末、妻の父である天帝カリクトウスの意向にそわない結果なのだが、

女の子とすることにしたが、カリクトウスの『皇太子として育てるように』といういつけは向こう15年間守ることになった。

何故第二子が皇太子なのかは、エーデルラントの動乱期に第一子レオンがさらわれてしまったことが大きかった。

第一子レオンは後に帝国の一領邦ノルトラント王国の鉄拳大公が単独で救い出したものの、

彼は機転をきかせてノルトラントの古い修道院に赴き修道院長にこの子を預けた。

皇帝ユリウス27世、彼はハインリヒと呼んでいたが、

彼はハインリヒの異母妹エルヴィラ（ルーヴィル大公妃）がその修道院を訪れることを知っていた。

彼は子供の産めない身体の大公妃にレオンを育てるようにもちかけた。

無論、その子の安全の為に事実には伏せられたのだが。

エルヴィラは修道院が帝室の誘拐事件を忘れないようにとレオンハルトと名付けた。

エルヴィラはよく異母兄のハインリヒのもとを訪ねたので、セドリックとレオンは兄弟のように育った。

二人は何をするのも一緒にセドリックが字を教えたら、レオンハルトは木の登り方を教えた。

帝国の情勢は非常に不安定だったが、ハインリヒは家族サービスに努め、セドリック・エリーザベトは何不自由ない幼少時代を過ごせた。

彼女が皇太子として育てられて数年がたつと、この国をよく統治し

たハインリヒは、妻テレゼにこう告げた。

「養子を迎えたい。我が子に万一の時はその子を後継者として迎えるつもりだ。」

テレゼは迷いながらも夫の決断を支えた。

「お兄さんになったときって嬉しい？」

セドリクが不安げに友達の前でみんなに聞いた。

「どうしたの？」

自由都市リーブルヴィルの盟主の子アルベルがオルガンを弾く手を止めてセドリクに聞いた。

「わたし、お兄さんになるみたい……」

「それはおめでたいとおもうのだけど……嬉しくないみたいな顔をしてるじゃない」

「うん……」

セドリクの顔は曇ったままだった。

アルベルは心配げにこう話しかける。

「ボクはお母様が死んじゃったから兄弟はいないけど、かわりに従兄弟が兄弟みたいに想ってくれている。」

でも従兄のアンスは歳が近いから、君のいう歳の離れた兄弟というのは少し違うかな？

うん……でもね。リーザ（セドリクの愛称）はみんなに優しいから、きつといいお兄さんになれると思うよ？」

だけどセドリクの顔は曇ったままだ。

セドリクは兄と弟両方いる母方の従兄のラインハルト王子に尋ねた。

「お兄さんになるってどんな感じ？」

「ああ？」

嬉しいが何だろうな。お前の場合は、やはりあれだな。

叔父上はお前の弟の方を後継者にしたいんじゃないか？」

「やっぱり……」

セドリクの顔がますます曇った。

「ちよつとライン……」

従兄（本当は実の兄）のレオンが横から会話に加わった。

「何だ？」

「彼女は君を慕ってるんだよ。もつと親身に答えてあげなよ」

「うむ……。オレも兄をなくしたが弟というものはだな。

基本は子分だから……。オレの家の場合を話しても参考にはならんぞ？」

レオンに向かってラインが言った。

「弟の方が完璧な男の子で産まれてきたら僕はかなわないな……」

セドリクが泣きそうになった。

「おいおい泣くなよな。男なら辛くても堪えるよな。」

新しいノルトラント大公の息子アンセイス・アンセルムス・ファレンティーン……通称アンスがセドリクの肩を叩いた。

「大丈夫だよ。アンス、僕は大丈夫だ。」

「泣きたかったら泣いてもいいんですよ？」

笑いながらラインは言った。

「リーザ……僕は君を弟のように想っているよ」

レオンがセドリクを慰めるように言った。

「本当に？」

セドリクの顔が明るくなった。

「お兄さんになれて嬉しい？」

「そりゃ君のお兄さんみたいなものだもの。嬉しいに決まってるじゃないか」

レオンは照れくさそうにセドリクの肩をバシバシ叩きながら言った。言い切った。

「へえー。へえー。僕もレオンみたいなお兄さんになれるように頑張ってみるよ。」

だって弟って言われて嬉しいもの。

きっと僕の弟も嬉しいと想う」

「レオンさんはうまいなあ」

レオンに拍手を送りながらアルベルが笑って言った。

「やっぱリーザはそうでなくちゃ。」

ボクも君の弟に早く会ってみたいよ！」

尊敬している父親を弟にとられたようでゴネているダメなひとにみえたセドリクだったが、

気持ちの切り替えが早いのがセドリクの良いところでもあった。

このようにセドリクは友達にも恵まれていて、早く尊敬する父親の役に立てるようにと日々頑張って生きていた。

それが武術であつたり馬術であつたり政治であつたりしたのだが、当のハインリヒは娘には文学少女のようにしとかで心優しい子供に育てたかったこともあり、

そのおてんばぶりには少々困惑していたのだが…

それはある日、セドリクが父のもとを訪ね、士官学校に通いたいというところで衝突した。

セドリクが士官学校に通いたいと言い出すので、ハインリヒは持っていた本を床に落とした。

今まで娘はいつたい私のどこを見ていたのか。

セドリクは軍人を市民の代表のように考えていて、

政治を志す者として軍務に就いておきたいと大剣を胸に抱えて熱く言った。

そういったことは將軍達に任せて、もつと世の中を見てみなさいとハインリヒが諭すと、

「ですが皇帝陛下のお役に立ってます」といつて聞かない。

ハインリヒは士官学校に通うのは、いくら優秀だからとはいえ、年齢的にはまだ早すぎると明確に反対したので、

セドリクは祖父の後ろ盾を借りることにした。

天帝と呼ばれるカリクトウス教皇は孫のセドリクが言う進路を歓迎して騎士修道士になるように言ったのでセドリクもこれにならった。

皇帝はセドリクをほめちぎる天帝に反論できず、呆れてしまった。

セドリクが士官学校に通うというのでレオンとアンスも一緒に行つてはどうかという話になった。

正直、子供一人ではさみしかろうとアンスの祖父で隠居した鉄拳大公が持ちかけたからだ。

飛び級した子ども達はお兄さんに混じって和やかに学ぶことになっ

た。

お兄さん達にお世話されてばかりなのではないかと思うくらいだった。

おかげで3人は良い環境でよく学び、よく遊んだ。

そうしてセドリクが14歳になると任官して王宮付けの騎士になった。

セドリクにとっては夢の第一歩を踏み出したように見えた。

「平和だな。良いことです」

セドリクは城から見える荒涼たる山々を見ながら紅茶を口に含んだ。

「今日のケーキが出来ましたよ」

とアルベルがベリーのミルフィーユを持ってくる。

アルベルも兵役で軍楽隊に所属していて夜勤明けのセドリクとお茶の時間を過ごすことが定番になり、

毎日嬉しそうにケーキを作ったり、お茶を淹れたりしていた。

「でも…いつになったら皇帝陛下のお役に立てるのだろうか?」

「自分の力だけで頑張っているものね。」

限界があるんじゃない?」

アルベルはふと思った。

セドリクの仕事内容は河川や城のある湖が氾濫した時は川に行って復旧作業に従事したり、冬は除雪作業、

それと土木作業が多くて、この地域に密着した活動が多かった。

政権は不安定だが、対外的に戦争もなく非常に平和なので、演習以外で軍功をあげることもない。

「そういえば、近衛隊の面接があったけど、どうだったの?」

面接があったのを思い出したアルベルがセドリクに尋ねた。

「…面接は不採用だったよ」

「やっぱり…わざと遠ざけているんじゃない」

つかぬことをおききした。

「わざと？」

「だって、陛下は殿下が軍人になるのをずっと反対していたもの。ちよつとパパに聞いてみるよ。といってもパパはご先祖様と違って將軍でも軍人でもないけど…」

「宮廷音楽家だろう。君の父上は」

でもね。とアルベルは付け加える。

陛下にお仕えしていることにかわりはないし、ご先祖様は將軍や古くは皇帝も輩出しているのだから

何かしら情報やコネクションを持っているんじゃないかと思ってとセドリクの耳元で囁いた。

「君の家柄はとても古いから確かに貴重な意見をいただけるかもしれないね」

とセドリクはたまにはアルベルを頼ってみることにした。

「ボクのパパもたまには役に立つってところを見せてあげるよ」

とアルベルは張り切っていたがアルベルの父で伯爵のピエールはそっけなく

そんなものないと答えた。

「え〜?!」

何かあるでしょ？」

「いったいどれだけ昔の話だと思っているんだ…？」

ご先祖様が皇帝だったのは古代の話だぞ…

確かに我がヘルムホルト家は將軍の家として北エーデルラントと南エーデルラントと

自由都市であるリーブルヴィル自治区を守護した家柄としては名高いが

私はしない音楽家だし…」

ピエールは上着を取って湖に釣りに出掛けてしまった。

セドリクは役に立てなくてごめんよと申し訳なさそうに縮こまるアルベルに気にしないように言った。

「やはりそんなに甘くはないということだよ」

そんなセドリクの声をよそにアルベルの落ち込みようは大変深いものだった。

そんな頃、皇帝ユリウス27世ハインリヒのもとに初老の將軍が訪れた。

「セドリク様も将来が楽しみですな。

陛下の片腕として働かれる日も近いでしょう」

ユリウス27世ハインリヒは將軍の褒め言葉にも表情を変えず淡々としていて、愚痴を言い始めた。

「私はあれが軍人になるのには賛成していないのだよ。

おとなしく將軍達に護られていればいいものを、何か無理を言わないかとヒヤヒヤしているよ」

これはこれとはいった大仰なジェスチャーをすると

「そうですか？

私にはお父上想いの少年に見えましたが、

陛下におかれましては、思うところが御座いましょう」

「はあ……」

皇帝ユリウスのため息は海より深かった。

セドリクが面接に行くので一緒に面接を受けた少年がいた。
レオンである。

実の父ハインリヒが悩んだだけ通知が遅れたが、彼は見事合格した。
頼杖をかいてるセドリクの前でレオンは言った。

「何か探ってみるよ。それと君を守るようになったからよろしく殿下」

その話は北の大国ノルトラントの鉄拳大公（彼は隠居しているが）
の耳にはいると、

彼は自国の近衛隊にセドリクを招いて知識と実践を授けるように手配した。

こうして双子はそれぞれ自衛の為の知識と技術を学ぶことが出来た。

いつも隠居したノルトラントの大公に気を遣わせていると知ると皇帝ユリウス27世ハインリヒは自らを恥じるばかりであったという。
「伯父上までセドリクを甘やかせすぎだ。」

セドリクのわがままにつきあっていないで放っておけばいいと思う
フォーデルバイデ侯のもとで医学を学んでいたラインはそう言う
とセドリクをきつく見据えた。

「それだけど、お父上を余程尊敬していないとなれないと思うよ？」
フォーデルバイデ侯の孫で自身も医師のルプレヒトがラインに話しかけた。

「お互い尊敬できる家族が欲しいものだな」

「君の所はお祖父様が厳しいからそれは大変だろうとは思っよ。
何か困ってはいないかい？私は困りどおしだよ」

肩まで伸びる茶色い髪を後ろで束ね結いながらルプレヒトは困って

いた。

どうしたんだとラインが尋ねると少し躊躇ったのだが、立派な装丁のついた書類ケースを本棚から出した。

「君のお祖父様、セドリク様を将来何にならせたいのだろう?」
まずルプレヒトは気になっていたことを尋ねることからはじめた。

「何って、聖職者になるようにと言っているな」

ラインが退屈そうな返事をしたらルプレヒトは「ああ、やっぱり」と相槌をうつて、しばらく考えると、

「私も今の内に身の振り方を考えておいた方が良さそうだと優しげに笑った。

表情は優美なのだが、すぐに眉間にしわをよせると

「私たち医師にはセドリク様のお身体の事を理解できても、民衆には簡単に理解できないと思う。

皇太子が本当は皇女だと知ったらなおのこと簡単には受け入れないだろう」

ルプレヒトがまじめな表情で話し出すので、ラインは「障害をもっているのだから仕方ないのではないか」と

言ってみた。

「君やファレンティーン王子には民衆からの支持があるから心配していないけどね。」
アンス

セドリク様は大貴族や各国の王様の寵愛があるけど、その反面君らのように民衆から慕われているわけではない。

もちろん、セドリク様は民衆の為に尽くしておられると思うよ。でも基盤が驚くほど脆いんだ。陛下もこれに特別な配慮はされていないみたいだから……」

「まだセドリクは子供だろう。」

そう心配せずとも今からでも間に合うと思うがな」

ラインは鷹揚に構えていたのだが、ルプレヒトは書類の紐をとりて目の前にいる親友にそれを見せた。

「これは？」

「私のお祖父様から預かったもののんだけど、セドリク様に関する文書と手紙と…それから…」

「ああ、例の手術の時のカルテか」

書類の中から一枚のカルテを見つけ、ひょいとつまんだ。

「これといって特別なことは書かれていないな」

ラインはカルテを読むとテーブルの上に戻した。

「こちらはどうか？」

ルプレヒトがそういって差し出した書類に目を通しながらラインは尋ねた。

「国外にセドリクを逃がすための書類みたいだが…」

昔は政情不安だったみたいだからその時のものみたいだな。でもどうしてこれをオレに見せる？」

「この国の行く末が心配なんだ。」

陛下はセドリク様を時期が来たら国外に出すつもりみたいだし…

ますます民衆の目には希薄にうつるんじゃないかな。

今は河川の復旧作業とか、割と地域に密着している活動をしているけど、

流動的というか、セドリク様は今のお仕事をステップのひとつみに考えてるふしもあるからね…」

「確かに今はあいつの夢…父親の片腕とまではいかないな。」

国外へ今頃出してどうするつもりだろうか。
旅行でもさせる気が叔父上は」

ラインが疑問を口にした。

「セドリク様を後継者にするのではなくて弟のユリアン・フリードリヒ様を後継に考えておいでのようだよ」

「ユリアンを…？」

ルプレヒトが書類を渡すので、今持っている書類をテーブルの上に置いてから、紙を持った。

「ユリアンを後継者にな…」

「姉弟で帝位や王位をめぐって争わないか心配だよ」

「どうだろうな。」

セドリクは父親の顔に泥を塗るのを避けているから、あまり深くは考えたことがなかったがな。

ユリアンの方は幼すぎて何とも言えないというのが正直な意見なのだが…」

いつしかルプレヒトは涙ぐんで心のうちを語ろうと口を開いた。

「いつか隠しきれなくなつて、セドリク様が女性だとバレてしまう日が必ずくる…」

それにはラインは何も言えなかった。

ラインとルプレヒトの2人が国をうれいていたころ。

ローゼルツ帝国より海を越えて東の大陸は影大洋諸国と呼ばれていて、

海軍の国フィロソフィアでは政変が起こっていた。

バルバラ伯爵領にあるハワード邸の庭はエデンの園を彷彿とさせるほど美しく、また池には錦鯉が悠々と泳ぐなど遥か東方の空気もあった。

800年続く伯爵家ハワードの当主アーサーは薔薇の手入れをしていて、

異母弟のヘンリがこちらに歩いてくる姿を見つけると手を振った。

異母弟ヘンリは会うなりこう言った。

「王制も倒れた。

オレは海軍に入って、兄貴をかげながら支える。

これが兄貴の為だ」

伯爵アーサーは驚いて異母弟ヘンリを引き止めた。

「私の為？

私はお前を失いたくない。

何もこんな時世に軍人にならなくても…」

そう言ってひきとめたのだが、ヘンリは言っただけ言つとさっさとバスに乗って行ってしまう。

アーサーも急いで後を追った。

ヘンリが家出した翌日に、アーサーの母マティルダ王女は將軍からこの話を聞いた。

「ハワード家にも困ったものですね。

アーサーに気をつけるように言いなさい」

マティルダ王女はアーサーの父と離婚していて、再婚相手の連れ子のヘンリが苦手だった。

しかもアーサーの父エリオットとヘンリの母は事故で他界したばかりで、アーサーの祖父は

この国の王なのだが、会談に赴いた所を

アルメリアという軍事国家の独裁者に捕らわれてしまい、

救出作戦が繰り返られるものの未だ成功していないので、

マティルダの頭痛の種は増えるばかりであった。

救出作戦には子供の頃、潮干がりに来ていた王に拾われた特殊部隊の士官スティブルストン中尉が加わっていて、

將軍はマティルダ王女に面会した後、彼を呼んだ。

スティブルストン中尉は子供の頃から世話になっている老將軍に敬礼すると、

將軍が何故自分を呼んだのかを聞かされた。

「君には、士官候補生ばかりなのだが、その若い部隊を指揮して光大洋諸国へ渡ってもらうことになった」

「閣下、しかしフィールドバリアがあるので渡れなかったのではあ

りませんか？」

「そのために新型潜水艦を配備した。

後は軍港から艦長の指示に従ってくれ」

「今回は偵察任務ということでしょうか？」

「そうなるだろう。健闘を祈る」

「心得ました」

こうしてステイブルストン中尉は任務につくことになった。

ステイブルストン中尉はすぐさま軍港に向かうと艦長に面会した。

士官候補生のリストが予定より少し変わったということ。

彼らが来るまで待っていてほしいと言われて1ヶ月も軍港に滞在することになった。

予定がどこかで狂ったみたいだとステイブルストン中尉は下士官にもらった。

1ヶ月を過ぎてから士官候補生達が軍港にやってきたので、出航することがようやくできたのだが、

彼は育ての親（アーサーの祖父）が心配で仕方がなかった。

主君の無事を願って国を後にした。

そんなことがあったとは知るはずもない光大洋諸国はローゼルツの帝都ローゼンでテレーゼ皇后は夫ユリウス27世ハインリヒを慰めていた。

「子供の考えていることは訳が分からん…」

ハインリヒがそう嘆くので、テレーゼは夫の頭を撫でて

「リーザのことですか？」

と言った。

「リーザでもセドリクでも一緒のことだが、

ユリアンのことで失敗するわけにはいかないし…」

何やら迷っている様子なので、テレーゼは娘のセドリクを褒めてみることにした。

「文武両道だなんて凄いじゃない」

「しかし、利発すぎて手に負えないのだよ」

「知能指数が高いのね。」

誰に似たのかしら」

「軍人になるなんて危ないことこの上ない。

もし大きな怪我でもしたらどうするつもりなんだろう…」

「心配しなくてもあの子は優秀ですから乗り越えますよ」

「……お前はいつも私のそばで慰めてくれるな。

助けられてばかりだ」

テレーゼはにこやかに微笑んでいた。

そんな夫の心配事も気にとめてテレーゼはセドリクを呼んだ。

「お母さまご機嫌いかがですか？」

セドリクは楽しそうに母テレーゼに挨拶して母の部屋に入った。

「あなたが楽しそうだから、私も楽しいわリーザ。
仕事は大変じゃない？」

「いろんなひとびとに助けてもらっているのですから何も苦痛はありません」

母を心配させまいとセドリクは背伸びをした。

「それなら良いのだけど、あなたは女の子なのだから、あまり無理をしてはいけませんよ？」

心配する人もたくさんいるのですからね」

そう心がけますが出来ないときはおゆるしくださいとセドリクは素直に言った。

「あなたには男の子と女の子のふたつの名前をつけたけど、本当はどちらが良いのかしらね？」

「わたしは自分を王女だと思ったことはありません」
セドリクはきつぱりとした口調で迷いなく言った。

「あら……」

テレーゼは心配そうにセドリクの顔を見たので、セドリクは何か気になることでもあるのか母に尋ねた。

「あなたが元気なら何も心配なことはないわ」

テレーゼは目を閉じて軽く頭を振ってから、再び笑顔をふりまいてセドリクに接していた。

それからしばらくしてセドリクは15歳の誕生日を迎えた。

その日、レオンがいつものように遊びにやってきたのだが、プレゼントを見るのは後にしてほしいと言った。

そんなことをいうのでセドリクはいったい何をくれるのかと首を傾げたのだが、

部屋でドレスの入った箱を渡されてびっくりした。

「お母さんが君にどうかって言ったんだけど気に入ってもらえると良いな。」

あんまり嬉しそうじゃないねえ……」

「驚いたよ……いったい何かと想ったけどこれは予想しなかった」

セドリクは目を点にしてしどろもどろ言った。

レオンはまあいいやと言った感じでセドリクに向き直ると、

「いつも一緒だったけど、これから君が困った時は僕が飛んでいって助けてあげるからね」

なんてセリフをセドリクに言った。

「ふーん。」

君の助けなんていらないけどね。ありがとう」
セドリクは照れを隠してそう言うのが精一杯だった。

その頃、名君の誉れ高いリーヴェ侯爵の娘ユリアナは領地にある館の地下から年代物のワインを探しに行くとき

皇太子に対する反乱に父が黙認していることを知った。

最初それは文書や暗号で交わされていたのだが、ひそひそ話を偶然耳にしてみればそれは現実性を大きく欠いていたのであまり気にはとめなかった。

父も軽く受け流していたのだろう。

ただ、幼なじみのラインには知らせておいてもいいのではないかと
思って会う機会を伺っていた。

これがひょんなことがきっかけで後々大きな問題に発展するとは、
その時ユリアナは考えもしなかった。

南エーデルラント王国にある帝都ローゼンでは君主が頭を悩ませて
いた。

どうも最近感情的で良くない。昔とは人が変わったようにセドリク
に接してしまう。

明らかにハインリヒは感情をセーブできなくなっていた。

異常性に気付いたフォーデルバイデ侯は孫のルプレヒトにそっと打
ち明けた。

「ユリウス陛下がですか？」

ルプレヒトがまたかといった表情で祖父を見る。

「私は陛下の侍医として見過ごすことはできません。ルー、万一の時は
セドリク様を頼んだぞ。」

私も持病を抱えてはもう先は長くはない。この国の行く末だけが心
配じゃ。」

「心得ております、御祖父様。ですが、何故、セドリク様だけにあるような態度を取られるのでしょうか。弟のユリアン様との扱いはまるで違う……」

「これは精神疾患ではないのだ。何か異質なチカラで遠ざけておられる。ユリウス陛下はセドリク様を後継者として認めたくないあまりに」

心のたがが外れたようにならされた。人の心に魔が棲んでおる。」

「御祖父様らしくありません。いったいどうされたのか……」

ルプレヒトは非科学的な祖父の言動に呆れた。「そんな目で私を見ないでくれー。」

「すみません御祖父様。ですが、仮に先程の話、ユリアン様を後継者にされるのであれば、大貴族の支持を失うことになるのではないのでしょうか。」

国内外の有力な諸侯から愛されているセドリク様をむやみに皇太子の座から追うとなると、普通は反対されます。

確かにセドリク殿下は今はお子様でそれを隠されておりますが、そう決められたのは陛下なのではなかったのですか？」

「だが現実には追放しようとなさっておられるよ。むろん理論的にはない。このままでは王位を巡って兄弟喧嘩にならないか不安で仕方がない。はては皇帝の座を争うかも知れぬ。」

「……では、万一のことがあれば私がセドリク殿下にお仕えします。そうならないよう尽力いたします。それでいいですね？」

「うむ。くれぐれも注意してくれ。」

「………はい。」

争いごとのない楽園に見える国で不穏な空気が漂い始めていた。

皇帝の心の中に魔が棲んでいるという。

現実ならば、大変なことだった。

だが、日に日にハインリヒ（ユリウス27世）はセドリクを遠ざけるようになった。

父親に愛されたいセドリクにとっては心が休まらない日々が続いた。

何がおかしいということではない。

王妃テレゼはリーザ（セドリク）を心配そうに見つめ、度々ハインリヒにもっと優しくと進言したが、

妻も夫の尋常ならざる異変に気付いていた。

だが、テレゼは愛するリーザに優しくするだけで、現状はこれとって改善されなかった。

「お母さま……あなたに愛されておきながら、父親の愛が欲しい等、わたしは贅沢ですか？」

ある日、耐え兼ねてセドリクがテレゼに尋ねた。

「あなたは男の子として育てたし、父親に理想を求めるのは自然なことよ。リーザ……もう一度聞くけれど……あなたには女の子としての名前もつけたけど、本当はどちらがいいの？」

「……わたしは王子です。王女だと思ったことはありません。」

「……拗ねないで。」

「すみません。意に沿わぬ子供で。そんなわたしではお父さまのお役に立てませんね。」

「……リーザ……」

「お母さまはわたしに何をお求めですか？」

王子らしく？」

「私は女の子のあなたが心配なのよ。本当ならばすぐ国外で平和に暮らせると思っていたわ。」

「わたしには守護すべき民がいます。祖国を見捨てたりはしません。騎士として、それが誇りです。」

「……………」

「わたしの命の心配をされていたのですね。心よりも。」
拗ねたセドリクにテレエは反論できなかった。

そんな渴いたセドリクの心を慰めるのは、幼なじみのレオンだった。ふたりは毎日よく遊んだ。
子供の頃からずっと。

スティブルストン中尉が軍港から学徒動員された士官候補生と共に海軍の新型潜水艦に乗り込んで1日が過ぎた。

「まもなくフィールドバリア区域にさしかかる」

ブリッジで艦長がスティブルストン中尉に説明した。

「海中なら航行可能とわかっていましたが大丈夫のようですね」

「そのようだ。」

スティブルストン中尉、準備は万端だな？

中尉達はカッターで上陸してもらう」

初めて航行する海域に冷や汗まじりに艦長が語りかけた。

「ハッ、いつでも上陸できます大佐」

部下が通信ブイを巻き上げると、上陸作戦を開始した。

ゆるやかで静かな海岸線を見つけると小型の上陸艇で砂浜にあがった。

人数にして僅か12名。

ローゼルツ海軍の監視の目を盗んで砂浜を走って行った。

明くる朝、フィロソフィアと同じ影大洋の軍事国家アルメリアの軍隊が上陸したのを知ったのは、

彼らが月明かりの絨毯の森と呼ばれるスズランの咲く森を進軍していた時だった。

彼らは森の中で放置されていた古い城を要塞がわりにしている最中だった。

古城に案内されるとアルメリアの女性士官の居るテントに案内された。

「私はアリシア・デ・コルトですねん。階級は少佐。坊やの名前は？」

かたくならんでも私はあんたらを食ったりはしやんで？」

赤い巻き髪的女性士官は軽やかに言った。

「ステイブルストン中尉です。」

名前はハーディン・イグレット・ステイブルストンです。」

「ほづ…東方系とのミックスばいね。よろしゅうに。」

デ・コルト少佐の気さくな態度に士官候補生達の表情も

緩んだ。

しかしスティブルストン中尉の表情は堅いままだ。

「ふうん…軍部の事情でも知っているみたいやね。」
アリシアが探りをいれる。

「自分は今回の任務前には国王陛下の救出作戦に加わっていましたが、陛下を拉致したあなた方の軍隊を許す気はありません。」

たとえば、今は共同戦線をはっていると知っても簡単には許せませんよ。」

「たしかにあんたらの議会を脅してはいる。」

「この森は深いし広大や、あんたらが迷わんとも限らへん。」

「この言語もはつきりせえへんし…このまま子供だけで行かせるのは気がかりや」

「ハーディン先輩…せつかくの好意ですから受け取っておきましょうよ」

士官候補生の1人が情けない声を出した。

「しかしだな…陛下は彼女らの軍の支配下にあるし、彼女らの目的もはつきりしない。簡単に従えるか！」

スティブルストン中尉は拳を震わせた。

「忠誠心篤いんやね。うらやましいわ。」

でも、偵察任務って情報をこっちは握っとるんやけどな。」

「……議会も我が軍部も屈したのですか？」

「そのようやね。おまけに、上はこの国も制圧しておかんと気がすまんらしいで。」

「そのための任務やったんちゃう？」

「……………あなた方は戦争をしにこの国へ？」

「そうや。もう戦争は水面下で始まっとるんやで。」

兵器の質は圧倒的にこちらの方が優位やからこの国が降伏するのも時間の問題なんやとちゃう？」

「実際うちらは空軍の爆撃を待つくらいやよ。」

「やからうちらが何とかしてフィールドバリアを解除せんとな。」

「フィロソフィア軍上層部が本当に、アルメリア軍と遠征を？」

「士官候補生の1人ハワード伯爵アーサーが尋ねた。」

「フィロソフィア王国の軍だけやあらへん。フィロソフィアの属領やったフェアデール連邦軍もや。」

「上は密約を交わしとるんやで。」

「馬鹿な……………」

「アーサーは頭を抱えた。」

「あんたらが、この森で迷っとる間に情勢はいろいろ変わっとるとゆう事をまず知っておいた方がいいね」

「……もしかして、あらかじめ分かっている上はハーディン・ステイブルストン先輩をこの国へ行くように手配させていたんじゃないですか？」

マリン・スナイパーの役をしていたヘンリ・ジュン・ハワードが訝しんだ。

「確かに私達3人は国王陛下ゆかりの者だが……」

顎に指をあてて考え込むハワード伯爵に異母弟のヘンリが

「オレは違うぞ兄貴」

と、付け加えた。

「じゃあ、あんたら、これからどうするつもりなん？」

本国からの命令を待つわけやる？

でも、どのみちやることは一緒やと思うんやけどなあ……」

アリシアは困った様子で少年たち学徒を見ていた。

その時、フィロソフィア軍から司令書が届いた。伝令将校は丁寧にアルメリア軍人に敬礼した。

中尉は頭が痛くなった。

おまけにフィロソフィア軍が到着するまでアリシアさんに同行せよという内容だったからだ。

「ただ、この国の言葉が分からないのがネックですよ、先輩」

「それが何とかなるかもしれない」

「何とかなるんならえんやけど、何かええテでもあるん？」

「……自分はこの国の言葉……聞き覚えがあるのでしょ。」

多分、自分が無くした記憶だと想います」

「記憶喪失だったんすか先輩！」

「……子供の頃、浜辺で陛下に拾われる前の記憶がないだけで、日常生活に問題はないからな」

「でもビックリしますよ」

「ほんまかいな…… あんたらほんまに大丈夫？」

「大丈夫、通訳くらいなら出来ますよ」

中尉はしっかりと口調で言った。

「ならええんやけどお」

張り切って国を出てきたのに現実には厳しいとスティブルストン中尉は想った。

一刻も早く育ての親の救出作戦に復帰したいのに、新しく戦争を始める準備を進めなくてはいけないとは……。

そんなこんなであつという間に1日は過ぎていき、彼らはアリシアが占領している古城に泊まることになった。

異変に気付いたこの古城の主であるディートリツヒ神父（ラインの弟）が父王ジークフリート25世に早馬を飛ばしたのは、これより2日後であつた。

ディート神父とテンプル騎士は勇敢に戦ったが、近代兵器の前に、特に機銃掃射の前に馬を狙い撃たれて敗走せざるを得なかった。

ジークフリート25世とラインハルト王子はただちに軍を編成して霧深い森に足を踏み入れた。

「賊め…ディートが庭の手入れに戻らなければ気がつかないところだつたわ」

ジークフリート25世が不安げに次男ラインハルトに話しかけた。

「心配しなくてもオレがいれば大丈夫だ父上。」

オレの神聖魔導を占領軍に見せてやる」「それは頼もしいが、封印された古代兵器を手に入れたと聞くぞ。

それに私はお前に皇帝の元へ一刻も早く向かってほしいのだが」

「…父上の身に万一のことがあつたら叔母上が悲しむからだ。

テレーゼ叔母上が皇后だというのにまったく父上は…」

「セドリクは心配ではないのか？」

お前のことだ、あの城が狙われる前に、妹の子であるセドリクが狙

われんとも限らん」

「セドリクも神聖魔導を使う騎士だ。賊を追い払ってからでも遅くはない！」

アルメリア軍と交戦するとラインはまず風を制した。

不思議な風で弾丸が発射されてもバラバラと落ちてしまう。しかしそれにも限度があつて、兵士全員を庇いきれない。

陣形を辛うじて保てる程度だった。

籠城する敵に決定打を浴びせられない。

しかも砲弾の雨を防ぎきれず、善戦するものの大局を制することが出来なかった。

「こちらも封印された兵器を再開発せねばなるまいな…

もうよからう。お前は皇帝のもとへ行ってハインリヒに兵器の封印を一時的に解くように言ってきてくれ」

「ちっ！オレ一人なら何とかなるのだが……父上、無事でいてくれ。お前たちは父上の周りを術で固めろ」

配下の兵に指示をとばすと馬を帝都ローゼンに向けた。

前線の混乱に乗じて反乱が起きたのはその頃だった。

反乱軍は民間人を盾にセドリクを捕まえると皇太子の座を退くよう要求した。

セドリクは要求はそれだけですか？

と言うと、あっさり応じる構えを見せた。

近衛士官のレオンがそれは出来ないと言ったのだが、わたしの務めは市民を護ることだ。

無論、次の皇太子を決めるのは皇帝陛下ご自身であって彼らではないと毅然として言った。

それを聞いた天帝カリクトウスが激怒して、皇帝ユリウスに軍を出すよう迫った。

「あれははじめから皇太子にするつもりなど私にはなかった。

義父上が皇太子にしたようなものではなかったか？」

ユリウス27世ハインリヒが冷淡に言う。と教皇カリクトウスはますます怒り出して自らの私兵を送り出すと共に

近隣の諸侯、特にノルトラントやルーヴィル、フォーデルバイデの各選帝侯に軍の派遣を命じた。

彼らが救出の軍を編成していると、解放されたが怪我をしているセドリクが戻ってきたので、カリクトウスは怒りに任せて

大馬鹿者と罵倒した。

セドリクはかえって落ち着いていて、

畏れながら市民を守護するのが第一の使命でございます。

無用な争いでしょうかおやめくださいと進言した。

北エーデルラントの王太子ラインが帝都ローゼンにやってきたのはそのような微妙な情勢下であった。

セドリク！お前らしいとラインが腹を抱えて笑うので、ますます頭に血がのぼった祖父カリクトウスはラインを錫で殴った。

ラインがこんなことをしている場合ではないと我に返ると選帝侯や天帝、皇帝の居る前で封印兵器の一時解除を提案した父王の親書を渡した。

甥のラインからユリウス27世ハインリヒのもとに親書が手渡され
ると、

事態を重くみた皇帝は条件付きで承諾した。

そうだった経緯で古代兵器群の氷山の一角が日の目を見ることにな
ったのだが、開発期間が短く、また間に合わなかった。

全軍に配備するよりも早く竜騎士団を誇るノルトラントの王は和平
調印に出向いた所を暗殺され、
また帝都ローゼンはノルトラントの制圧によって制空権を失い包囲
された。

エーデルラントの言語が分かる者として、ステイブルストン中尉が
最後通牒に現れた。

「ステイブルストン中尉と申します、皇帝陛下」

「敵ながら天晴れといったところか……」
ハインリヒにいつもの覇気はない。

「フィロソフィア、フェアディール、アルメリアの空軍が帝都を包
囲しています。

降伏いただけない場合は帝都を絨毯爆撃します。

陛下、どうか無用な流血は回避していただきたい」

ステイブルストン中尉が叔父に話しかけると、ハインリヒは悟った
かのように片手をあげて玉座から段をおりてきた。

「いつかこのような日が来ると想っていたよハーディン」

「は？」

突然名前を呼ばれてステイブルストーン中尉が困惑した。

「いったいどこの賊と思えば甥の軍だったとは…」

誘拐されてつきり死んでいたものと想っていたが、よく帰ってきたな。」

「はい？」

「どうした？」

…聞けば、弟のディートリツヒ神父を負かせたらしいな
てつきり賊かと思えば、北エーデルラントの正当な王位継承者ではないか」

「王位継承者？」

「ふむ…恐怖で記憶をなくしたか？
自分のおかれた立場をよく理解していないと見える」

「いえ、自分は、任務で参ったわけでありませう。皇帝陛下。」

「任務…か。良からう、いづれは君のものになるかもしれぬ国だ。
統治するいい機会になるだろう。」

こうしてあっけなく戦いは幕を閉じたかに見えたが、
南エーデルラントの王で皇帝であったハインリヒは、妻のテレゼ
と養子のユリアン・フリードリヒをいち早く国外に逃すべく
古代兵器ヘリコプターに乗せたばかりだったので、どこか安堵して
いた。

帝国は占領軍によって瓦解するかもしれないが、いずれ復権出来る日も来るだろうと。

もつとも帝国内外の反乱軍によってヘリコプターが撃墜されたのを知ったのは占領軍に後事を委ねた後であつたが…。

レオンに連れられてセドリクが城の地下水道を歩いていたのはハインリヒがスティブルストン中尉と話していた頃だった。

「……まさか僕が逃げ出すことになるとはね。覚えていろよレオン。」

「解放軍を組織して戻って来るまでの辛抱だよリーザ。」

君は怪我人だから、当分は無茶させないけどね」

レオンと一緒になので、どこか空気は明るい。

「やるべきことはたくさんあるな。まあ、お前となら出来そうなのがするよ。」

地下水道から、月明かりの絨毯の森に出る。

「月明かりでスズランが綺麗だねリーザ。」

「綺麗だけど、きな臭くないか？」

「そういえば…」

「遠くで爆発した……」

警戒しながら爆発地点に向かうと帝室の紋章が施されたヘリコプターが墜落して炎上していた。

「みんな死んでる……………」

「お母さま！」

「えっ?!」

レオンが振り向くとセドリクが声を上げて泣いていた。

スズランの…聖母の涙の花だけが月明かりの向こうを悲しく照らしていた。

セドリクは埋葬するとき、母から貰ったイヤリングの片方を外して母テレーゼの耳につけてあげた。

天国への階段と呼ばれるスズランの花束と一緒に。

「きっと祖国を守って死んだんだ…」

レオンはそんなセドリクを慰めた。

レオンは疲れきった様子のセドリクを船に乗せると、横にならせた。

「お母さまの為に今まで頑張つてくれたのに…」

セドリクの疲れが激しいからだ。

「君は怪我人なんだからね。ユリアンのことも考えるのは今はやめ

よう…どうしようもなかったんだ…」

「……………うん……………」

セドリクは力ない。

レオンは海を越えてローバーン王国につくと、まずセドリクに普通の生活をさせるように心がけた。

解放軍の結成は無理かもしれないと思いながらも胸中はセドリクだけでも無事で良かったと考えていた。

セドリクの具合がすっかり良くなって、生活費が足りなくなってくると、セドリクは近くの学校で働きだした。

その頃になると、この国もフィロソフィアの軍に対抗できなくなりつつあり、

ローバーンの王子に加勢するべく、ローゼルツ帝国の北方最大の領邦国家のひとつであったノルトラント王国の

王子アンセイス・アンセルムス・ファレンティーンが当地で解放軍を組織した。

竜騎士の彼は竜騎士団を再編成してフィロソフィア軍に対抗した。優秀なドラゴンはその羽で数々の攻撃を無効化して一定の戦果をあげていた。

「アンスが来ているのね」

すっかり女口調になれた感じのセドリクが休日のお茶の時間に新聞を見せて言った。

「行ってみるかい？リーザ」

「……………悪くないけど、この普通の暮らしもすてがたいわ。なんてね。冗談よ。」

アンスが頑張っているのなら、さりげなく応援に行ってあげるのが

親友のつとめよ」

「そういうと想ったよ。でも今度こそ君は無理しちゃダメだよ。王様も無茶は望んでいないからね。」

雪の降る中2人は砦に向かった。

「よっ！」

お前ら生きてたのか。悪運強えな！リストからもれて行方不明だったからずっと探していたんだぜ？」

アンス王子が笑って出迎えた。

「ここはノルトラントの軍人が多いから、エーデルラントの宮廷にいたような時のギチギチした空気はないぜ。安心して過ごせよな。武器は…持っているみたいだな。

聖遺物を二つも持ち出すなんてすっかりしているよな！」

セドリクの持つ聖なる大剣ロザリオ・ディレクタフォンと、レオンの持つ聖剣オーカーを確認するとアンスが笑った。

「そうそうアルベルもいるんだぜ？」

アンスがアルベルの部屋に案内する。

アルベルはオルガンを弾く手を止めると「良かった！よくぞご無事で！」

とセドリクの無事を泣いて喜んだ。

「アルベルは泣き虫ですね」

セドリクがからかうとアルベルは、これは喜んでいるんですとムキになって反論した。

それはそうだ。アルベルにとってセドリクは最愛のひとなのだから。アンスは従弟のアルベルの心の内を思い出した。

この知らせは瞬く間に国王夫妻と王子達の耳にはいることになり、セドリクと従兄のレオンハルト王子の無事を心から喜んだ。

ローバーン王国の南にあるサミディア王国の王ラルスはこの知らせを聞くと直ちにセドリクに援軍を送ることを決めた。
サミディア王室とローゼルツ帝室と南エーデルラント王室は先祖を同じくしていて、現在も親交が深かったのだ。

（訳注：小説版と漫画版の第1部第1章終了間際でセドリクはレオンがハーディンの追っ手から庇った際に生き別れており、レオンはエーデルラント地方にとどまっていた。

この為、第1部第2章冒頭では放心状態のセドリクと記憶喪失のハーディンが細かく描かれたのだが当作品では省いている。

この作品を500ページに編集出来るか疑わしいので、当作品はハイレイト版の性格が強い。）

解放軍の志気があがっていた頃、ステイブルストーン大尉は帝都ローゼンの執務室に自身の弟だという
ラインハルト王子を招いていた。

「検査の結果が出た」

「そうか…」

「間違いなくあなたはオレの兄だ。遺伝子情報が兄のものと同じだったそうだ。」

「にわかに君が弟だとも信じられないがな…」

「従妹のセドリクは覚えていないのか？」

「小さい頃兄上がいつも面倒をみていた」

「セドリクの名前は聞き覚えがあるが……すまないな…そこまで記憶は回復していない。」

「まあ、焦ることなんてないよな」

腰に手をあてて喋っていたラインが腕を組んで笑うと机の上の書類を見た。ラインが笑うのは珍しいのだが、それも覚えていないハーディンは当たり障りのない範囲で説明した。

「元老院を再編して議会を作らないといけないんだ。この国は今まで専制政治だったのによく今まで統治してこれたな。驚異にあたいする」

「古い議会政治はセドリクが興味を持っていたな。あいつはオレと違って政治家になるつもりだったみたいだから」

「…セドリク王子と従兄のレオン王子が生きていたそうだ」ステイブルストーン大尉がラインにそう告げた。

「2人が陥落のどさくさに紛れて逃げたのは知っている。セドリクは怪我をしていたが元気になったみたいだな。」

「解放軍を組織していると言うことは？」

「そこまでは知らない。アンス達と合流したか。」

「私は近いうちにローバーンに行くことが決まっているが、君はどうするつもりだね？」

君さえよければ一緒に来てくれて構わないそうだ。

医師は不足しているから…」

「たしかにここにいてもろくなことは無いだろうな。

退屈しているから、ついていってやってもいい」

「セドリク王子に会えることもあるだろう。」

無論、君が解放軍に荷担しないのが前提だがね。

ハインリヒさんも来るそうだと。」

「叔父上も？」

「向こうで会談を予定しているから、それで来られるそうだと。」

「会談をしにローバーンへ？」

「実はセドリク王子が先日我が軍との交戦中に王室の血をひくバルバラの伯爵アーサー・ケネス・ハワードを怪我させたそうだと。彼は私の部下だね。落馬した際に頭を強く打って意識がない。」

王室の方もお越しあそばせる。」

「……会談には興味がないが……オレにいったい何をしろと？」

「伯爵を診てほしい。伯爵が回復したら両王家も和解できるだろうと。」

「仕方がない。セドリクも余計な仕事を寄越すものだ……。」

ラインはしぶしぶ了承した。

「では至急荷物を纏めてくれ。早速ローバーンのアーサー・ハワード伯爵のもとに飛んでもらうと。」

ホーエンツェザー家の兄弟は空路ローバーンへ向かうとハイデルベルク城へ急行した。

ここが会談の舞台に選ばれたからだ。

今回の会談ではちゃんとエーデルラントの宮宰も招かれていて、占領計画が順調なのを影大洋三国の高官たちがアピールする目的もあった。

会谈というよりは各国首脳の密談に近かったのだが、一定の和平交渉が行われた。

アンス・ファレンティーン王子達の解放軍とフィロソフィア軍が特に制空権をめぐって熾烈な戦闘を繰り返していたのだが、和平交渉の為、一時休戦となった。

和平案はかねてから検討に検討を重ねて周到に準備されていたのだが、フィロソフィア王の孫アーサー・ハワード伯爵がセドリックの一騎打ちで意識不明の重体に陥ったことにより、予定より早められることになった。

ハワード伯爵の異母弟ヘンリは異母兄の仇を討とうとしていたので、セドリックと話すことなど何もないといまいます。言いはなつと、和平交渉よりも寧ろセドリック王子暗殺計画の方に共鳴していた。その為、和平交渉にはハワード家のバルバラ伯爵アーサーの母マティルダ王女が赴くことになった。

豪雪地方のハイデルベルク、一月の寒い日に各国首脳は一同に会した。

「前の和平交渉では父ちゃんが暗殺されたんだが、今回はまともに行えそうだな」

アンスが机の上でペンを回しているとマティルダ王女が話しかけて来た。

「先代ノルトラント大公のお悔やみを申し上げます。

ファレンティーン王子にはご迷惑をおかけしましたね」

「戦争の虚しさを痛感しただけだ。

謝ってもらって父が帰ってくるわけではない」

そう返答するに留めた。

「あれは事故だと聞く」

アルメリアの大臣が重い口をひらいた。

「…それについて論議をしにきたわけではあるまい」
皇帝の座を追われたハインリヒが両者を窺めた。

「色んな者が死んだ。

ハインリヒの妻と三男も殺された。

王侯貴族から本来殺戮の対象外であるべき非戦闘員まで…」
サミディア王ラルスの口調も重い。

「わらわの息子もいまだ昏睡から覚めぬ…」。

これ以上の犠牲者を出さぬ為にみな参ったのです！」

マティルダ王女はそう発言すると場は静粛になった。

マティルダ王女は盲目と聞く。月夜の姫と呼ばれた女性だ。そういつた囁きが交わされた。

「ノルトラントは今、どうなっているんだ？」

アンス・ファレンティーンがマティルダに尋ねた。

「かの地は先代大公グスタフ殿が治められています」
「そうか」

じーちゃんが、とアンスは心の中で付け加えた。

「本日は伯爵の異母弟君が来るとうかがっていたのですが…いかがなさいましたか？」
渦中のセドリクが礼儀を重んじながらフィロソフィアの武官に尋ねた。

「セドリク、彼は来ない」

武官のひとり、ハーディン・ステイブルストン大尉がスマートに返答した。

「そうですか…」

教えてくれて感謝します」

「ヘンリ・ジュン・ハワードには気をつけなさい。セドリック王子。彼はあなたを恨んでいます」

「心にとめておきます」

ところで、とローバーン王が切り出した。
何故休戦の申し入れを？

「そもそも我が国はアルメリアの支配下であり、これ以上、王家からの犠牲者を出さないためです」
マティルダ王女は難しい表情で説明した。

「確かに無益な戦が多かったが、ずいぶんと弱腰ではないか王女よ」

「国王陛下は戦を好みません。今回の事に頭を悩ませておいでです。私はせめて、娘としてのつとめを果たしたいのです」

「そうであつたか…」

会談は平行線を辿ったが、マティルダはこの話とは別に内密にだがエーデルラントの返還問題に言及した。

時期が来たらハインリヒに国を返すと言うのだ。

そのかわり、フィロソフィアとフェアディールには攻め込まないでほしいと告げた。

「あの戦いはなんだったんだ。クソッ！」
アンスの怒りはやり場がなかった。

「わたしだって！」
怒りの矛先にあったセドリクが本音を言った。

伯爵アーサーをフィロソフィア軍に引き渡すと、ラインは神聖魔法で回復するかどうか試みた。

効果は数カ月してからあらわれて、アーサーは目を覚ました。

ヘンリはラインに礼を言うと言ったとアーサーの回復を心から喜んだ。
そうして月日は流れ春になったころ、ステイブルストン少佐の加わる国王救出作戦はようやく成功し、
やがて彼らは国に帰ることになった。

解放軍がエーデルラントに凱旋帰国した時、ノルトラントの鉄拳大公グスタフはセドリクとレオン、ハインリヒに真実を告げた。

真実を告げる前に帰って来てくれて良かったと言ったが、セドリクとレオンはショックを受けた。

レオンはセドリクに淡い恋心を抱いていたと言うと、セドリクは馬鹿だなと言って諦めた。

レオンはしばらく空気が抜けたようになっていたが、いつしかセドリクの姿が見えないので、あちこち探した。

エーデルラントの遅い春、春の女神オスターラの花スズランが、月明かりの絨毯の森に咲く頃…。
ステイブルストン少佐の帰国の際に、ハーディン・ステイブルストン少佐にセドリクはひとことこう告げた。

「ついでく」

第1部 完

第2部第1章

フィールドバリアの晴れた海原を空から眺めながら、輸送機が温暖なフィロソフィアに到着すると、
ステイブルストン少佐は国王夫妻に謁見した。
彼らはセドリクの渡来を歓迎すると、ステイブルストン少佐には今回の功績を讃えてナイトの位を授けた。

ステイブルストン少佐の仕事は以前よりも忙しくなったが、暇を見てはセドリクを観光に連れて行った。

やがて新学期が始まる秋になるとハーディンはセドリクにこう言った。

「ハイスクールに行かないか？」

お前も年頃だし、普通の暮らしなら通う頃だ」

ハーディンが夕方、任務から帰ってくると白い軍の手袋をひっぱりながら、セドリクにすすめた。

「それは楽しそうだけど、学費とかどうするの？」

セドリクが家計のことを気にしたが、生活費なら叔父上からいただいている、と、今を楽しむように言った。

「オレの今の仕事の関係上、

フェアデールとの国境沿いにあるハイスクールで時々部下の家にホームステイしながら通うことになるかもしれないが、

送り迎えはする」

ハーディンが普通の生活を楽しむように言ったので、面白そうだからセドリクは通うことにしてみた。

ポプラの並木道を通って、彼はハワード邸にセドリクを連れて行った。

ヘンリは当初セドリクに対し良い印象を持っていなかったのだが、セドリクが女だとわかると女相手にムキになるのはバカらしいと言っ

てムスツとはしているが態度を変えていた。

すっかりよくなった伯爵のアーサーが先輩であるハーディンが忙しいことを知っているので色々気を利かせて

セドリクを家に招いたのだ。

そしてハイスクールにはフィロソフィアとフェアデール二国間の生徒が通っている

新しいハイスクールで、学園生活を満喫することになった。

セドリックは同じハイスクールに通うフェアデールの士官候補生のロウリーの弟ティムや

ウィニーの妹リン、そしてジョシュアの妹シャナンと仲良くなり、彼女たちと良く遊ぶようになった。

毎日がとても明るくてセドリックはいつも楽しそうだった。

セドリックはハーディンを昔から頼っていたのだが、こうしてまた頼れることができて、

感慨深かった。

冬が来ると、ハーディンの異母弟のラインが遊びに来て、仲良く昔のことを話したものだった。

もともとハーディンにはその記憶はあまりないのだが弟の機嫌が良いので、それも楽しむことにした。

やがて海外のフィロソフィア領で独立戦争が起ると、ハーディンはスティブルストン少佐として戦線に出征していった。

時々、ラインカルプレヒトがハーディンの家を訪れるようにしていたので、セドリックはあまり寂しい想いをすることもなかった。

その頃から、祖国の南エーデルラント王国の王都ローゼンでは、国王ハインリヒが選帝侯達を呼んで新しい皇帝を選出する準備にかかっていた。

南エーデルラントとルーヴィルの王太子レオンは次期副帝として、ノルトラントのアンセルムス・アンセイス・ファレンティーンは次期正帝ラインの皇太子としてそれぞれ正式に迎えられた。

長期化する独立戦争が次第に暗い影を落としてはいたが、その列強のパワーバランスから世界は武装平和と呼ばれる時代になっていた。

ラインが次の正帝に立てらることも関係していて、次第に彼がハーディンの家に来る回数も減っていった。

ヘンリ達が士官学校を卒業して海軍少尉として任官して出征した頃、両エーデルラント王国は概ね平和だった。

セドリクはハイスクールを卒業すると、ハーディンもヘンリも国にいないことも関係していたのだが、一旦国へ戻ることになった。

ハインリヒがセドリクを皇帝のパラディンとして再びエーデルラントに呼び寄せたからだった。

ハインリヒは当初これに難色を示していたが、ついにセドリクの自立を考慮してこれを承認する決意をした。

第2部第2章

「リーザ、本当に母国に帰っちゃうの？」

シャナン達はその話を聞いて花束を持ってセドリクのもとを訪れた。

「この国で新しい仕事を見つけることも考えたのだけど、

自分に与えられた義務を放棄することは…わたしにはやっぱり出来ないの」

「義務？」

リーザは確かエーデルラントって国から来たんだっけ。

義務って聞くと何だかお堅いわね」

リンがセドリクに尋ねた。

「わたしは南エーデルラントの王家に産まれたのよ。

わたしは国から逃げて来たのだけれど…、

自分に与えられた務めは果たさなくちゃ…」

「国には仕事があるんだね」

ティムが言った。

「わたしにはやりかけの仕事があるの。

あなた達のことは絶対に忘れないわ！」

セドリクは荷物を纏める手を止めて友達に話した。

「シャナン達はその後、勉強も仕事も順調みたいね。

一緒に大学には行けないけど頑張つてね」

「ありがとうリーザ」

シヤナンはミス・ハイスクールでモデルの仕事もしていた。

その愛らしい波打つブロンドをかきあげてセドリクの手を握った。

「いつでも帰ってきてね。」

私達は貴女の友達だから」

その言葉にセドリクの胸は詰まった。

「いつも弟達の面倒をみてくれてありがとうな。」

弟達も寂しがるだろうけど、いつかはこういう日がくるから、いい勉強になるよ」

8人兄弟の二男ティモシーが言った。

「うん。」

それとティムも士官学校に進学したのね」

「うちは親父が將軍だし、兄貴も将校になったからな。」

俺もそのへんちよつとばかり期待されているんだよ」

「貴方のお兄さんのロウリーは元気なのかしら？」

彼も戦場に行っているのでしょうか？」

「兄貴からはたまに手紙が来る。」

戦火の中で恋したって噂だけど……だから元気なんじゃねえかな？」

「そんな噂があるのね！」

セドリクはクスツと笑って見せた。

「そうそうティムのお家のお隣に住んでるリンの方は？」

兄貴のウィニーは元気なの？」
シャナンが近所話をはじめた。

「ウィニーは除隊することばかり考えてるわ。
任官拒否しておけば良かったってそればかりなの。
気弱な性格してるからね」

「ウィニーは心配だわ。
ヘンリだっていつも気にしているのよ。」
ヘンリの家にホームステイしていた事のあるセドリクは心配げにリンを見た。

「まあ、ウィニーが戦死しないようにエーデルラントの教会で祈ってやってよ」
リンが苦笑混じりに兄の心配をする。

「もちろんよ。
それとみんなにも手紙もいっぱい書くわね」

「楽しみにしているわ！」
「身体には気をつけるよ。
お前も軍人なんだから」

そんな話を4人は夜が明けるまで交わした。

第3部第1章

エーデルラントの北、ノルトラントの更に北にある小国では、ちょうど夏祭りをしていた。

国王が神々に祈りを捧げ終わると、祭りの扮装をして、お忍びで城下町に出ると一軒の、まだ準備中の酒場に足を運んだ。

「お祖父ちゃん」

酒場で働く女装のルルが老いた王を見ると、グラスを拭く手を止めた。

「お前が養っているあの子…ロスヴァイセは元気かね？」王はカウンターに腰掛ける。

「もちろん元気だよ。お祖父ちゃんは元気なさそうじゃない。

ずいぶん疲れた顔をして…ますます老けたんじゃない？」

ルルはずいぶん心配そうに祖父を見た。

「……実はな…セドリク王子が国へ帰国するらしい」

「それはまた…」

外交問題が再燃しなきゃいいけどね…」

「お前の父親はまだ幼かったセドリク王子が、父方のマクシミリアン王子の父親に脅されたそうだが…」

帝国への併合の際、セドリク王子が軍事介入してきた、あの時から未だ行方不明じゃし…」

これでは和解できるものも和解できんのう」

「そうだねえ…」

一体どこに行ったのやら…」

困ったようにルルはそう言うといスキをロックにして出した。

「まったく…若い王子にも困ったものじゃな…
お前はお前で…こうだし…」

深くため息をもらしながらウスキーをのむ。

「ハインリヒにも釘を刺しておかねばならぬ……」

そしてセドリックは月明かりの絨毯の森を抜けて湖の城に帰ると、
挨拶もそこそこにその話を父王から聞いた。

「マクシミリアンが絡んでいたなど初めて聞いたが、一体あの時何が
あったんだね？」

話してみなさい」

「申し訳ありませんがお話できません」

セドリックは申し訳なさそうに父親に返事した。

「しかし、彼らと話し合って必ずしも何かが解決するというわけ
はない。

お前が軍隊を非武装地帯に入れた時に交渉は決裂したのだから…」

セドリックが士官学校を出て間もない頃こんなことがあった。

父親の話し合いの場に軍隊を入れたのだ。

この時の混乱に乗じて、ルルの父親は何者かにさらわれてしまった。

問題はいつもここである。何年もたった今もまだルルの父親は見つ
かっていない。

当然セドリックはその責任を問われた。

「私はかつて異母弟と帝位を争ったが…異母弟の子マクシミリアンも事件に関係していたのだな？」

「……………陛下と叔父上の喧嘩話になるとは思いましたが、詳しい話はお話できません。」

わたしは皇帝陛下であられたお祖父さまと約束していますから」

「お祖父様と約束？」

「お祖父さまはただ兄弟で争わないようにと仰せられ、わたしに約束をさせました。」

その約束が何であつたかはお話できません」

「……………そうか…」

ハインリヒは交渉が決裂したのは自分にも非があつたのだと知るとため息をついた。

「とにかく、お前も私のパラディンになるのだから軽々しい行動は慎むように」

ハインリヒはそう言つてセドリクを注意した。

「では友達に挨拶でもしてきなさい」

セドリクを謁見の間から出すとセドリクは階段を下りて幼なじみ達に会いに行くことになった。

一階の中庭の噴水の前でアルベルはヴァイオリンを弾いていた。セドリクは足を止めてその幽玄で奥行きのある音色に耳を澄ませて聴き入った。

そして演奏が終わると惜しみなく拍手を送った。

「リー…セドリク様！

もう帰ってきたんだ？」

それに気づいたアルベルがセドリクに駆け寄った。

「久しぶりだね。

元気そうで良かった…」

セドリクが胸に手を当てて話す。

「君こそ元気そうでボクも嬉しいよ。

また逢えて良かった」

アルベルは満面の笑顔で笑ったので、セドリクもにっこりと微笑んだ。

「セドリク様、夕食はどうするの？

良ければみんな誘って一緒にどう？」

「良いね。みんな元気かな？」

「元気、元気」

ヴァイオリンをケースにしまってスコアを脇に抱えると、アンスの仕事場に向かった。

そのときアンスはちょうどブリーフィングを受けていて、しばらく待つことになったのだが、

ふたりは楽しそうにお喋りして過ごした。

庭の薔薇のこと、今書いている楽譜のこと、料理の話にお菓子の話、それと音楽院に通ったこと…色々話した。

やがてアンスが出てきて、片手をあげて挨拶した。

「元気だったか？」

ハインリヒのオッサンと仲直りできたみたいで良かったな！」

ハインリヒは表向きセドリクを長いこと避けてきたのだが、生活費や学費を陰ながらハーデインに送ったり、

親らしいことは一応していた。

だが、そんな事を知らないアンスは、セドリクがハインリヒのパラデインになるということで

和解したのだと思った。

「色々問題を抱えているけど、まあそれなりにうまくいけるとは思うよ。

それよりラインの皇太子になるみたいだけどよく受け入れたな」

セドリクが不思議がる。

アンスもラインもこういった政治的な話は好まなかったからだ。

「それは考えたんだけどな。

ラインの奴ばかりに押しつけるのもかわいそうだから、

少しくらいは手伝ってやることにしたんだ」

「へえ！

僕も応援するから頑張りなよ」

セドリクがにこやかに祝福した。

「それでさ、アンス、みんなで夕食を食べない？

つもる話もあるでしょ」

アルベルがアンスを誘う。

「いいぜ！仕事が終わったらどこに行けばいい？」

「宮廷礼拝堂は？」

あとレオンさんも誘いたいんだ」

「わかった。じゃあ宮廷礼拝堂でな」

アンスは手を振って仕事に戻った。

「宮廷礼拝堂？」

セドリクはアルベルに気になったことを聞こうとしたのだが彼はセドリクにとって意外な事を口にした。

「レオンさん、従軍神父になったんだ。

セドリク様、何も聞いてなかった？」

「全然、今初めて知ったよ。

そうだったのか…」

セドリクはレオンをふったことを思い出して考え込んだ。

そして知らなかったとはいえ実の妹に恋心を抱いた罪の意識が、
彼を軍人から一人の聖職者に導いたのだとしたら セドリクは
事の責任を感じられずにはいられなかった。

「どうかしたの？急に黙っちゃって」

アルベルの声に現実引き戻されるとセドリクは

「ああ、何でもない。さあ、レオンのところに行こう」

そう言うのが精一杯だった。

アルベルは心配そうにセドリックを気遣うのみ。

宮廷礼拝堂では選帝侯のひとりディートリッヒが神に、静かに一日の無事を祈っており、

彼の従兄のレオンはパイプオルガンで讃美歌を厳かに伴奏していた。

アルベルたちが宮廷礼拝堂の扉が開かれると中に入ってきたのをレオンは見えて、オルガンを弾く手を緩めた。

テンポの乱れたカンタータが彼の心理状態を表現しているかのよう。

「リーザ！」

「おお！セドリック様！お帰りなさいませ」

レオンが言うのとほぼ同時にディートは従姉に駆け寄って再会を喜んだ。

「ディート、レオンはオルガンを弾けるようになったのですね」

「さようです殿下。演奏家のアルベルと過ごすことが多くなりました」

「そうなんだ。いつもアルベルに教えてもらったりしているんだ。ありがとうアルベル」

レオンがいつもと変わらない優しい口調で言うので、セドリックの方も気が楽になり

自然とただいまを言うことが出来るのだった。

「レオンさん、ディートリッヒ様、今夜は皆で食事会でも楽しみませんか？」

セドリク様のご帰国を祝って！」

「レオン、仕事は？」

「今日は休日だから、大丈夫だよ。もちろん喜んで！」

「ありがとう皆」

「そのうちお父さんが来られると思うけどどうする？」

休みの日はお父さんをここで待つことが多いんだ」

「うん、陛下にお話ししておこうかな？」

「夜はお父さんと夕食をとることが多いんだ。」

君は外国にいたし、独りじゃ寂しいと思って」

「そうだったのか。わたしの留守を守ってくれてありがとう」

「セドリク様、何か食べたいものとかある？」

ふいにアルベルが聞いてきて、セドリクは少し考えをめぐらせると結論を出した。

「そうだな。」

「湖のニジマスとかそのうち食べたいね」

「じゃあ湖で釣った魚でも食べる？」

「これから？」

「そう」

「お父さんも誘ったら？」

レオンがジョークまじりに言う。

「陛下はお忙しいだろう」

「私がどうかしたのかね？」

廷臣にかためられた宮廷礼拝堂の主が言った。

「ああ、お父さん。ちょうどよいところへいらっしやいました。皆で今夜の夕食の話をしていたのですよ。」

セドリクは湖の魚が食べたいって言うから、これから釣りでもしようと思って。

お父さんも一緒にどうです？」

レオンがすこぶる機嫌良さそうにハインリヒに話しかける。

「うーむ」

ハインリヒは休みの日も仕事が残っているので頭を悩ませるが、息子の問いかけに対するこたえを探っていた。

「せっかくの休日ですし、いかがでしょう？」

「長居は出来ないがそれでも構わないかな？」

「もちろん構いません。」

セドリクも喜びますよ」

「ふむ」

そうしてハインリヒが宮廷礼拝堂での仕事をしてから、ボートを出して釣りを楽しむことになった。

ハインリヒは仕事の都合で長居は出来なかったが、よく釣った。

釣れた魚を厨房に預けて再び宮廷礼拝堂でアンスの帰りを待つことになった。

やがて日が暮れなずみ、軍服姿のアンスがやってきて幼なじみの再

会を再び祝うのだった。

「そうか。よく釣れたか！」

所でラインには会わなかったのか？」

「ライン？」

まだ会っていないけど、フォーデルバイデ侯のところにいるだろうか？

でも休日だから、どこに居るのかはわからない。

ディートは何か知っていませんか？」

「兄上は今朝早く出かけられましたが、今はもう自分の部屋に戻ってきているのではないでしょうか？」

それで王宮にあるラインの部屋に足を運んだ。

「何だお前たち…そろそろと」

ドアを開けるなりラインはつぶやいた。

「皆、帰国を祝ってくれているんだよ」

「オレはお前とよく会っていたから何とも思わん」

ドアを閉めようとするラインだったが、アンスが足を挟んだ。鉄板が入っているごつい軍靴だ。

「アルベルが今日釣った魚でムニエルを作ってくれるんだと。

メシにしようぜ！」

そういうことでラインも食事会に誘われることになった。

そして暖炉のある食堂で和やかにセドリクの帰りを祝う。

「そうそう。ハインリヒのオッサンはセドリク、お前を陸大に通わせるつもりらしいぞ。」

今日、そんな話になった」

アンスがムニエルを頬張りながら言う。

「陸軍大学へ？」

「お前は騎兵だからな。しばらくの間は隊付で仕事をしてからになると思う」

それに驚いたレオンがフォークを軽く弄んで妹に言う。

「幼年学校にも通わせてくれなかったのになんでだろうね？」

レオンとセドリクが目を見合わせた。

そこでさりげなく

「叔父上の病状も最近は大いぶ落ち着いている。

セドリクの将来を考えてのことではないか？」

ラインがナイフとフォークを置いて話に入った。

「前はリーザの事を避けたりしていたけど、今日なんかは全然そんな感じに見えなかったよ。」

なら いいのだけど」

レオンはそう結んだ。

「アルベルのお料理とても美味しかったわ。今日は色々どうもありがとう」

セドリクはアルベルにそう言っただけで喜ばせる一方アンス達には、「フィロソフィアに行くまでのわたしは功に焦っていたから、物事の順序や年相応の事柄をわきまえていなかったと思う。

お父さまが……いや陛下のパラディンとして、学ばべき事がたくさんあるのなら、

それに従おうと思います」

と、言った。

それを聞いてアンスもはにかみながら語りかける。

「まあ、3年前より父娘関係は良くなってると思うぜ。頑張れよな」

「ありがとう。」

そう言ってもらえるとより頑張ろうという気になる」

セドリクは嬉しそうに微笑んだ。そして今度はディートの顔を見て言った。

「今日は礼拝堂に行ったのに、友達の無事を祈るのを忘れていました」

「では明日お祈りいたしましょう」
ディートも穏やかに微笑む。

「どんな方でしょう殿下のお友達なのでしょう」

「フェアディール連邦共和国の海軍少尉でハーディン（ラインとディートの異母兄）の後輩の方です。

彼は任官拒否したかったようですが、今は南部戦線に出征しておりわたしの友達もとても心配しています」

「きつとお優しい方なのでしょね」

「はい。とても気のいい方でした」

「むこうでは友達たくさん出来たみたいだね。」

「ヘンリと仲直りできたって聞いているよ」

「レオンもセドリクに話しかける。」

「ヘンリのお家からも学校に通ったから、その時仲良くしてもらったの」

「うん。良かったじゃないか。」

君と一騎打ちした伯爵も良い人だったみたいで、彼のお祖父さんからあの時のことはもう振り返らないように言われたよ。

「今も未来も大切ならそうすべきだ」

「フィロソフィアの王様らしいね」

「兄上が診たというバルバラの伯爵ですね」

「ん？ああ…そんな事もあったな。」

あの時は正直駄目かと思ったものだが」

「アーティが？」

「そうだ」

「ラインのおかげだね。本当にありがとう」

「どういたしまして」

ラインはそっけなく返事した。

こうして夜はふけていき終始和やかな雰囲気です翌日を迎えた。

皇帝直属のパラディンとして、また参謀本部付の将校としても覚えなくてはならない事は山ほどあったが、

それも無理なく指導してくれる上官がセドリクの側についた。

日々は緩やかに平穏に過ぎていき、やがて帝国に併合される国にある湖の塔で行方不明となった王について

話し合う日が来た。

王、カール１１世の父で現国王カール１０世とその王子シャルルとその娘ロスヴァイセが南エーデルラントの宮廷を訪れる形をとることになった。

というのもハインリヒの異母弟ヴィルヘルム公とその子息マクシミリアン王子がかの国での話し合いを渋ったからだ。

「我が息子カール１１世と南エーデルラント王ユリウス２８世ハインリヒは友達じゃった」

まずカール１０世はそこから話をはじめた。そしてハインリヒが捜索に協力を惜しんでいない事を評価した。しかし一方で息子のセドリク王子に理解できないともらした。

「愚鈍な皇太子でしたよ。セドリクは」

マクシミリアン王子が素知らぬ顔で言う。

色々情報を集めていたカール１０世は不快感を露わにしてマクシミリアンに話しかける。

「ほう、裏でこそそと騎士団を動かし従弟のセドリク王子に圧力をかけておいてよく言う。

このような事では余の息子の魂も浮かばれんわい」

「私が従弟の皇太子を脅したとでも？」

「結局異母兄との口論になると思っていた」

「今日は先代ヴィルヘルム帝の名をけがしにきた訳ではないだろう異母弟である大公の同名の父親の名前を出してから、カール１０世にはこう言った。

「結局の所、どうされたいのだ、王よ」

カール１０世は一段と険しい表情を作る。

「では単刀直入に言おう。セドリク王子を国際法で裁いていただきたい。

うすうす黒幕がいるとは思っておったが、

セドリク王子も10代の子供とはいえ、我々もこのような不祥事を起こす王位継承者についてはいけぬ！」

カール10世はやりきれなかった。小国の王という立場が問題を複雑化させた。

「私も自身の皇太子を変えることになったが、それでも足りぬと？」

「南エーデルラントの王位が残っており！」

「南エーデルラントの王太子はセドリクの兄であるレオンハルト・ゲールノートだったが、

息子が従軍神父になった時に、再びセドリクが浮上した。

どうしたものか……」

「聞けばセドリク王子を皇帝直属の聖騎士としたそうじゃが。軍を辞めていただきたいと思うておる！」

「私の直属ならば、あのような不祥事は二度とないと思ったのだが、ご不満か。

再教育は徹底する。しっかりと」

そこでルルは組んでいた腕を動かしてセドリクに訊いた。

「そんなに軍人になりたかったの？セドリク王子は」

「皇帝陛下のお側に置いていただけたらと、ですがわたしも兵役中の身です。逃れるわけにはまいりません」

「兵役ねえ……確かに王子が以前のように留学を理由に兵役を逃れたら民に示しはつかないね。

まあ、セドリク王子は軍のエリートで、エリートコースに乗っているのは

正直に言ってこっちは見ていて面白くないということだけど、

……あんな事さえなければこんな事言わなくてすむのにね。こう思うことも無かったのにね」

ルルは一応セドリクを氣遣つてはいた。

ルルが穏やかなのでカール10世の怒りも多少は静まった。

「多額の金品ももらっているから私は様子見だけど…」

「先代のヴィルヘルム帝の時代では、

ごほっ！

こんな事は…！」

「おじいちゃん大丈夫？」

ルルが祖父を氣遣う。

「わしも長くはない。氣がかりなことばかりじゃ…」

心は女性かもしれないが自分の孫であるルルに背中を撫でられて、カール10世は本音を言った。

「セドリクの兵役中はそちらの言い分は出来る限り考慮するということだよろしいか？」

ハインリヒがそう言つて心配そうに声をかけた。

「こちらで武官をエーデルラントの宮廷に…新たに置かせていただくがかまわなかね？」

「もちろん構いませんよ。連絡は密にしましょう」

ハインリヒは皇帝としてではなく同じ王として年上の王を敬つて返答した。

「それと真相解明を急いでくれ」

ハインリヒは無言で頷いた。それはハインリヒも知りたかったのだ。

幼いロスヴァイセは庭の噴水の前を行ったり来たりして遊んで待っていた。

毎日噴水の前でヴァイオリンを弾いているアルベルは猫耳の少女を見て楽器を弾く手を緩めた。

「なにして遊んでるの？」

アルベルは腰を落とすと優しくに話しかけた。

ロスヴァイセは振り向くと人懐っこそうに返事した。

「噴水で遊んでいるの！」

ママとグランパを待っているのよ」

「ママとおじいさんを。見かけないけど王宮は初めて？」

「うん。今日は王様と王子様とお話するんだって。

それとね。エーデルラントに来るのは初めてよ。

お庭を見ていていいって言われたから、見せてもらっているの」

「王子様？」

セドリク王子様かな？皇太子だった。

お城だけあって庭も綺麗でしょ」

「そうセドリクくん。昔、私の国に軍隊を入れた……」

「軍隊……」

「私、ちっちゃかったけどルルママのパパが居なくなっただからそれは覚えてる」

「ああ、わかった！

ルルママってシャルル王子のことだね。お城のバーを新しくした」

猫耳の少女と話をする一方でアルベルはセドリクが責められてはいないかとても心配した。

「うん。ルルママはバーで働いているのよ」

隣の国にフェルプールのお姫さまなんていたかな？と思いながら、アルベルは思った。

「お城のバーでボクも演奏したことがあるよ。
楽しいよね」

「うん！」

ロスヴァイセは複雑な事情を知らないしまた気にしないでいたので、あんな事があつた後でも明るく笑っていた。

ただママのパパとまた遊べたらいいなとは思いつつ。

噴水の前で金髪の美少年と話をしている姿を見つけたルルはロスヴァイセ達に声をかけるために近寄った。

「ルルママ！」

「シャルル王子！」

「待たせたね。」

えーと…リーブルヴィル伯爵のお子さんだっけ。ヘルムホルト家の…名前は…」

「はい。アルベルです。」

昔、セドリク様と一緒に伺ったことがあります。

あの時は非武装地帯に騎士団を入れることになり、申し訳ありませんでした。

あの時、皇太子殿下は一刻も早くユリウス陛下にお知らせしなくてはならなかったのです」

アルベルはセドリクの方も頭を下げて謝った。

「ああ、それね。

セドリク王子も反省しているみたいだしね。

同時に父が賊に襲撃を受けて失踪したのはまた別の理由があったと思っているわ。

あの時のセドリク王子もあなたも間の悪いときに来たのね」

「本当にすみませんでした…」

「仕方がないなあ。あんまりクヨクヨしないことね。

お互いの国の将来を考えていてくれるならなおさらのことよ。それにしても若いわね。今いくつ？」

「あ…はい…セドリク様と同年で18歳になりました」

「ねー。ルルママ、お話どうだった？
楽しかった？」

「ん…そうねーなかなか有意義だったわよ。」

セドリク王子もあなたも若いんだからもつと前向きに考えてねー」
服の裾をひっぱる養子の娘とアルベル、ルルは同時に二人に話しかけた。

「はい。セドリク様も悩まれることが多いので伝えておきます」
アルベルが硬くなった表情を崩して言った。

「ルルママ、これからどうするの？」

「ああ、どうしようかな…お城の中でも見させてもらおう？
それともお庭見学させてもらおうかな？」

「良かったら、案内させてくださいね」
「いいねー。お願いしちゃおうかなー」

「ルルママーおなかすいたー」

「じゃあ、食堂でも案内しましょうか？」
「すまないわねえ。お願いできる？」

「はい！喜んで！」

そういうことで一行は食堂に足を運んだ。

「ラインさん！」
なんと食堂ではラインとルプレヒトが料理がでてくるのを待っていた。

「あら、ライン王子おひさしゅう！」

「うん？アルベルか。」

それと……」

アルベルの後ろからやってきたルルと幼い少女を見て

「シャルル王子、ご無沙汰しています。

そちらの子は……？」と挨拶をした。

「私、ロスヴァイセ！」

「はじめましてロスヴァイセちゃん。

私はルプレヒト。お城の医者です。

こちらはラインハルト・テオドリヒ皇太子殿下で、みんなはライン
って呼んでいます。

よろしくね」

「うん、ルプレヒトちゃんとラインくん よろしくね！

私達ごはんたべにきたのー！」

ロスヴァイセが楽しそうに笑った。

「うむ、腹が減っては戦はできんからな。たらふく食っていくと良
い」

「うん！何がでてるか楽しみー」

椅子に腰掛けて足を揺らすロスヴァイセの愛らしい姿にルプレヒト
は思わず微笑んだ。

「落ち着きのない子でねー」

つられてルルも笑う。

するとそこにアンスがやってきてラインのそばに來ると折り紙で折
られた紙切れを渡した。それから

「こんにちは」と何事もないかのように挨拶した。

ラインは渡された折り紙を開いて書かれた文章を読むと吹いた。

「どうしたのーラインくん？」

ラインはしばらく考えてから

「ああ…うちにもオカマ王子がいるんだが、そいつの配属：仕事場がオレは変だと思ったのだ」と返答した。

「馬鹿か！こんな所ではらす奴があるか！」

アンスはラインをこづいた。

「ラインさん、セドリク様がどうかしたんですか？」

アンス、どういう事？」

アンスの従弟のアルベルが2人にわけを聞いた。

「ああ、オレはオレと同じで隊付だと思っていたんだけどなー。違
つてさ」

アンスは少し残念そう。

「ああ、そうだな……例えるとだな…目立ってはいけない所に王子
が配属された」

「？」

「なぜなぞー難しいのー！」

ロスヴァイセが可笑しそうに笑っているので、ルルは黙っているこ
とにした。

「目立つてはいけない所？」
アルベルが首を傾げる。

「このなぞなぞ難しいよねえ」

ルプレヒトがロスヴァイセに言う。

「うん！考えるー」

ルプレヒトは微笑ましく思った。

シャルル王子の国とは近年関係がうまくいっていなかったが、何も知らない子供がいると不思議と和むのだ。

こういった子供達の為にも未来は明るくしていかななくてはならないと思う。

「目立つてはいけないって、セドリク様みたいに剣技に秀でたお方は目立つと思うのですが……
ええと……どこだろう???」

もどかしくなってラインはアルベルに折り紙を渡した。

紙には『参謀本部付』と走り書きがしてあった。

「すごいじゃないですかー！」

「凄い以前にマークされてしまつては意味がないと思うがな。
昔から言うだろう参謀の無名性を……

どうしてこうなったのか疑問だ」

「なら君が殿下を補佐してさしあげれば？」

ルプレヒトが何となく答えを察知してラインに微笑みかける。

「ふむ…君主は大元帥、未来の総司令官で戦場の指揮官に育てていくつもりなのだろうか」

ラインは少し考える。

「難しく考えるほどのことでもないと思うけどなあ」

「なぞなぞ答えわかったの？アルベルくん」

アルベルはそれにはかなり困った様子で答えを出した。

「それがね…平和的じゃないねえ…」

ボクの従兄のフアレンティーン王子は兵隊さんだから、そもそも平和的じゃないんだけど…」

うーんと唸ったままだ。

「戦争はいけないよ。ホントに死んじやったりするんだよ。ルルママのパパもいなくなっちゃった……」

「……すまん」

アンスが場の空気を察してロスヴァイセに謝った。

「さてと！食べるぞー！」

ロスヴァイセ、フォークの準備だ」

そう言ってロスヴァイセの背中をルルが押す。

「じゃあボクはシェフに頼んできますね。

ロスヴァイセちゃんは何か食べたいものある？」

「お子さまランチー！」

「かしこまりました」

そう言つて厨房に向かう。

「えっと、あなたのお仕事って何時まであるの？」
アンスは急に仕事のことを聞かれた。

「普段は毎日夜の7時まで、時々夜半まで。
夜勤の日もあるけど朝から働くときはたいてい7時までかな」

「おなかすかない？」

「すく、すく！」

「じゃあいっぱい食べるといいわよ」
天使のように笑った。

「平和だな」

「平和が一番だよ」
ルプレヒトが笑って言う。

しばらくして食卓に料理が運ばれてきて楽しい食事会が始まった。

銀の食器に色とりどりの果物が並べられ、サラダやローストビーフ、
スープなどが食卓を所狭しと賑わした。

ユワラーも忙しそうだ。

食後にアルベルがヴァイオリンを弾いて華をそえた。
吟遊詩人みたいに弾き語りが出来たら良いけどねと照れながら。

「上手ねー！バーで雇いたいくらいだわ」
ルルはそんなことを言う。

「いつか殿下のバーでも演奏させてくださいね」
アルベルがそんな思いもしないことを言ったのでルルは嬉しくな
った。

「友好の架け橋になつてくれるのね」
「私も呑みに行つてもいいですか？」
ルプレヒトもルルに尋ねる。

「おいでおいで！
みんなでおいで」

楽しい食事会だった。

アルベルは今日の日記をつけるのが楽しみだった。
ルルがいればきつと円満にいくと思った。

第3部第2章

「…フィールド・バリアってあったじゃないか。」

いつもと変わらない夜、　　白夜でまだ外は明るいが　　、アン
スは仕事帰りのセドリクを捕まえると、そう話し始めた。

「ああ…およそ300年前に出来たという魔法の壁　　光大洋と影
大洋を隔てる障壁のこと？」

「それ。で、オレ達は自由に行き来出来なかったのに何故、急に魔法の壁が晴れちゃったんだろうな？」

それでフィロソフィア軍でもフィールド・バリアについて研究されていたと聞いた。

それで、向こうにホームステイしていて何か知った事ってあるか？」

「…急に晴れたってハーデインは言っていたけど…詳しくは知らない」

「そっかぁー」

「何か、気になるなら、手紙でも書く？」

ハーデインもヘンリも戦場だけど、郵便は届くみたいだから。」

「そっだな。」

こちらでも、あの一件以来、海軍と空軍がフィールド・バリアがあった海域を観測しているが、
不明な点ばかりなんだと。」

「フィールド・バリアが無くなって戦争になったからね。」

あれには参ったねえ…」

セドリクの寢室の前について、ドアを開けた。

「立ち話もなんだし、中に入る？」

「いや、いい」

「何か疲れてるみたいだけど、今まで軍のフィールド・バリア研究に深くかかわった？」

「まあ、それなりに。」

「そうか。で、フィロソフィア軍の研究が気になったのか。」

「…それだけじゃないんだけどな！」

セドリクが首を傾げた。

「まあ、君は幼なじみだし、一緒に士官学校にも通った仲だけど、あの戦争から、お互いの任務は変わったよね。」

竜騎士だった君は今軍のパイロットだし、僕は時代遅れの騎兵で、参謀本部に配属された。

戦争でお互い家族を亡くしたから、君はそれを引きずってない？」

「…お前の母ちゃんの墓参りとか行ってるか？」

「この前の日曜にやっとだけだね。レオンとお父さまと行った。本当は帰国してすぐ行くべきだったね。」

「アンスは？」

「うちの親父の墓は、ノルトラントだから、あまり行っていない。」

「君の故郷はここからはちょっと遠いからね。
帝都勤めではなかなか帰れないか。」

「ああ」

「まあ、今度時間を作ろうと思うぜ。じゃあまた明日な。」
「またね」

アンスは掌をひらひらさせてそそくさと帰った。

翌日、ルプレヒトはセドリクのもとを訪ねると挨拶もそこそこに用件を切り出した。

「……………」

しかしセドリクは途端に重い表情を前面に出した。

「おそれながらお聞きますが、非武装地帯にあなたは何故武装したまま馬を進めたのですか？」

そうしてまでも御父上に伝えなくてはならなかった原因はいつたい…私には皆目見当もつきません。」

ルプレヒトは胸中のもやもやを思い切って伝えようとした。

「…………わたしからその事について話すことは出来ない」

「侍医の私にもですか？」

あなたには尽くしてきたつもりです。信用してお話ください」

「…………お祖父さまと約束したことがある。その内容は父である陛下にもお話しできないことだ……」

「御祖父様と申されますと……先代……それとも天帝陛下でしょうか？」

「陛下の父上にあたる……先代の皇帝陛下ですよ。固い約束故、選帝侯にも話すことは出来ません」

「では、非武装地帯の事は致し方ないことだったと……」

「他にも手だてはあったと思うし、わたしが未熟故おこったことだ。」

そなたには本当に申し訳ないことをした。」

セドリクはそういつてフォーデルバイデ侯の子息に頭を下げた。

「セドリク様、どうかお一人でお悩みになれませんよう」

「いや、事情が事情ゆえ相談しにくいのですよ。」

わたしから情報を漏らして良いものか……」

セドリクなりに悩んで言葉を詰まらせた。

ルプレヒトはそんなセドリクを心配に思う。

冒険はまだまだ続く

まだまだお話は続きますが、ひとまずこの辺で区切りたいと思います。

第3部第2章は次回へのおまけみたいな感じです。

ここまでお読みくださりありがとうございました。

【訂正箇所】

以下、設定上の誤植のようです。

×ユリウス27世（一部では23世バージョンもありました）ハイ
ンリヒ

ユリウス28世ハインリヒ

古い記録によるとハーディンはジークフリート9世の設定があるの
で、父王ジークフリート25世は正しくはジークフリート7世の筈

謹んで訂正をお詫びいたします。

写本A版（前書き）

E I N G L A N Z 写本A版

（きはねせりな／著）

作品番号／592477

ジャンル／ファンタジー

最終更新日／2011/5/23

オリジナル小説写本A版

写本A版

序章 虹色の雪

虹色の雪

いと高き天から雫がぽたり。

大いなる恵み。

天使の光がきらきらと反射して結晶をつくった。

秋植えの植物がちらほら芽吹く……。

……。風が光をはこぶ。

「リーザ」

ボクはそつとよびかける。

「リーザ。」

吐く息は冷たい。

ただ、ただ、幻想的なまでに、

ただ、ただ、家庭的までに。

言葉を失うほどの朝の光景。

そして、庭の美しさ。

朝露に濡れた秋の花。

じきに雪が降る。

ほんのり紅をさしたグリーンアイスのような光彩を残して。

ユリウス23世ハインリヒは目を覚ます。

気が付けば朝。人払いをした執務室で寝てしまったようだ。

あの夢は何だったのだろうと考えたのだが、あまりゆっくり考えて

いる余裕のない自分が少し悲しかった。

セドリク・エリーザベトの父親として立派に振る舞おうと心がけて

はいたが、近年は冷たく接してしまいがちだ。

あれが小さい頃は家族サービスにつとめていたのだが、最近はその

もままならないせわしなさと国内の政情不安。

いつのころからか、気が付けば厳格な父となっていた。

娘には強く生きて欲しいと願ったからだった。

子供は双子で産まれてきた。

男の子と、両性で産まれてきた子。

先に王妃が産んだ子は元気な男の子だったのだが、二人目の子は先天性障害児だったので手術をしなければならなかった。

とても健気に生きてるように想えた。

政情不安に悩む皇帝の子供として産まれなければ、もっと幸せだったであろう。

それが不憫でならなかった。

政情不安による政争で、生後間もない息子のレオンを誘拐されてしまい、行方が知れないのだ。

腹違いの妹は自分が修道院から迎えた子にその名を与えることにした。

修道院がこのことを忘れないように、この子を愛するようと。

港街ルーヴィルの大公夫妻は幼いレオンを抱えてよくハインリヒの元を訪ねていた。

公子のレオンは双子の妹は仲良く暮らしていた。

本物の兄妹の様に。

妹が育てている子供こそが皇帝夫妻もルーヴィルの大公夫妻も誘拐事件で手放した子供だと知らずに育てることになったのだった。

実は機転をきかした北の盟主、ノルトラントの大公（アンスの祖父）が、その子をすりかえたのだったが、

その子の安全を願い、事実は伏せられることになった。

こういう複雑な経緯から、王妃の祖父からの意見で、残された妹は兄の分も期待されて、王子として男子同然に育てられることになった。

ハインリヒはこれをあまり快く思わなかった。

この子に王位を継がせたくなかったからだ。

もっと普通の人生を送って欲しいと想う。

こうして両親から愛されて育ったセドリク王子は何不自由のない子

供時代を過ごすことになった。

ハインリヒは眠る時間も惜しんで、家族サービスに努めていた。たとえ目の下にクマができることになっても。

黙っていれば知的な黒髪のイケメンなのに。

その姿は哀れ親バカの域で時々愛する妻にも呆れられていたのだが、子供うけは良かったようだ。

こうして黒髪のイケメンと淡い金髪の愛娘は実は親子じゃないなどと囁かれて育った。

「最近、お父さまが冷たいの。アルベル」

「え、何？リーザ」

「お父さまが冷たいの。それと、わたしに弟が出来たのよ。」

「そのオカマのような喋り方、何とかならないのか？」

「ハードゲイなのかお前は。」

アルベルの従兄のアンスがデリカシーの欠ける突っ込みを入れる。

「ハードゲイで王子、退廃的だな。この国の政情不安をこの上なく妙に表現している。」

あれだ、弟を正式な王位継承者にしようという、叔父上の考えの現れ的一端なのではないか？

第一お前が君主？

「ハア？」

「ラインさん！」

アルベルが言いたい放題の主君に突っ込みを入れる。

「ラインの言う通り弟が出来たから急に冷たくなったのかも知れない。」

ラインを割りと慕っている雰囲気のセドリクの顔が曇った。

「もしそうなら、酷い話だ！直訴しよう。」

アルベルがセドリクの味方をするのだが、いまいち要領が良くないセドリクはただ、小さく溜め息をするばかりだった。

「弟の方が完璧な男の子で産まれてきたら、負けてしまつかもしれないな……。」

「リーザ、ちよつと冗談だつて。落ち着こうね？」

従兄のレオンが心配そうに実の妹を見つめる。

「弟ができたのは嬉しいのだけど……」

おとなげない事を恥じる様子もなく言うセドリクはファザコンだったのです。

弟に父親をとられたような気分になるとは、だだをこねる駄目なひとのように見えたのでした。

「泣きたかったら泣いても良いのですよ？」

またラインがセドリクをおちよくる。

「ライン！」

レオンがラインを制止する。

「甘やかしすぎなんだつて。面白いオッサンだけどな。」

アンスが横やりを入れる。

「コントじゃあるまいし、国家元首が面白いオッサンなんて言われていていいのだろうか。」

最近の父は厳しい。昔は優しくかったけれど、威厳が必要だからかもしれないが……面白くないな。」

「面白いオッサンの方がいい」

セドリクが矛盾したことを言っているので、アンスは素直に思っている事を言った。

「お兄さんになるってどんな感じ？」

セドリクが兄と弟両方持つているラインに聞いた。

「オレはファザコンじゃないからな。嬉しいが、別に、人それぞれでいいんじゃないかな？」

ラインが余裕の無い感じのセドリクに対して遠慮がちに言う。

「多分もつと歳が近ければ嬉しかったんじゃない？」

君は今色々抱えているみたいだからね。」

「思春期ってやつだな」

レオンとアンスも親身になって答えてくれた。

「僕は君を兄弟のように思っているよ。」

レオンがそうつけ加えた。

セドリックは途端に嬉しそうに笑顔を輝かせた。

今までの周囲を覆っていた重く暗い雰囲気は嘘のように晴れたようになった。

「やはり兄がいると嬉しいものだな。頑張るよ。」

レオンに励まされ機嫌を直したセドリックだった。

めでたしめでたし。

そんな年頃の子供の心配をよそにハインリヒは新しく迎えた養子に家業を継がせようとしていた。

彼はどうしてもセドリック・エリーザベトを政治家に育てたくないのだった。

平和な人生を送って欲しいと心から願っていた。

娘が時折外交問題に興味を示したりするのだが、子供の好奇心の芽を摘まない様にするだけで、あまり父親から進んで教えようとしなかった。

セドリックはそんな父の姿勢を敏感に感じとったのか、父親に頼らず、自分から進んで学ぶようになった。

ハインリヒはそんな娘を見て、最終的には娘の意志に任せようと考え直した。

血筋とは恐ろしいな…。

一抹の不安を抱きながら。

よりよい国づくりを目指して頑張っている娘を見ながら、いざとなれば亡命させなければならぬ国内外の情勢にハインリヒが頭を悩ませていた。

「あなた、無理をばかりしては駄目ですよ。」

王家出身の王妃が夫を心配するのも無理はなかった。

共和主義者の夫が国内外の貴族から反感を買うことがあるだけになおさら心配だった。

何とか息子のユリアンが成長する息子の代には社会福祉制度の発達

した共和国として安定した世の中になるように土台を築いてやりたかったのだが。

だが、セドリクには一所懸命に働いている父が誇らしかったのだ。この国の為に働きたい。

心からそう想った。

娘が士官学校に進学したいと言い出したのでハインリヒは手にしていた本を落とした。

どうやら娘は軍人は市民の代表のように思っていたようだ。

政治家を志すためにも軍務に就いておきたいというのが娘の主張だった。

心優しい文学少女のように育って欲しいと思っていたハインリヒだったが、いつしかフェンシングのサーベルや乗馬が得意な、現実的な娘に育っていた。

現実的なのは、早く父親の役に立ちたかったからだろうか。

両手持ちの大太刀を手に防衛について語る娘、父は深い溜め息をつくと、明確に反対した。

「ですが、皇帝陛下のお役に立てます」

娘のセドリク・エリーザベトがそう言う。

父ハインリヒの言葉が余程心外だったようだ。

一体娘は私の何処を見ていたのだろう。

ユリウス23世ハインリヒは自らを振り返ると共に娘の将来が不安で仕方がなかった。

ハインリヒは自身を厳しく戒めると、無理に厳格な父を演じていた事や、気が付けば娘を厳しく育てていた事を激しく後悔した。

もとのびのびと平和を愛する健やかな子に育って欲しい、ハインリヒは今までの子育てを今一度見直すことにした。

なにしろ彼は養子で自分の後継者であるユリアンの子育てに失敗は許されないと考えていただけに娘の進学先に神経をとがらせた。

セドリクもファザコンなのだが、早く父の役に立ちたいと、いつからか功を焦るようになった。

結局、母方の父、天帝カリクトウス（ラインの祖父）の影響力を後
ろ盾になかば強引に士官学校に進学した。

そもそも障害を持つ娘を王子に育てるように言ってきた教会の長に、
ハインリヒは公然と反発出来なかった。

娘がバッシングされる原因は出来るだけ作りたくなかったのだが、
この皇帝と教皇の関係は周囲から奇異に見えた。

「皇帝陛下と教皇陛下、お2人の関係って重いわよね。」

セドリク様の教育方針で揉めているって話よ。

オカマ王子と言われていらっしゃるからね。

神学校に通うという話もあったそうよ。」

メイドが気に入らないひそひそ話をしていたので、アルベルは不愉快な顔をした。

アルベルはアルベルで王妃の実家に代々仕える身だったからだ。

セドリクの従兄にあたるラインが彼の主君である。

そういう気分なのか、ここ最近はずいぶんヴァイオリンの曲を演奏するばかり。

「何でボクの主君はラインさんなんだろう…」

ラインさんの叔母様にあたる王妃様の子供のリーザなら良かったのに」

伯爵の長男の贅沢だが後にメロドラマになるような深刻な悩み事だった。

「不安だ。」

ハインリヒは娘が年々逞しくなっていく姿を見ながら、不安な日々を過ごしていた。

「心配しなくても、あの子は優秀ですから大丈夫ですよ。」

文武両道だなんて凄いじゃない」

ハインリヒが悩んでいると傍らにはいつも王妃のテレゼの姿があり、彼を優しく慰めるのだった。

＊第1部第1章＊

セドリクは同じく士官学校に進学した友達のレオンやアンスと一人前の騎士になるべく日々精進し、共に学校生活を送るようになった。やがて任官し、セドリクは王宮付けの騎士となった。

父王の補佐がつとまる日を夢見つつ…。

政情不安といっても、その後ハインリヒは事実この国をよく治めており、

歴代の君主も百年前に内紛があったものの、対外的に三百年間戦争の無い平和な治世となっていた。

彼女は川が氾濫した時に川に行って復旧作業をしたり、冬の除雪作業や土木作業に従事して過ごしていた。

「平和だな。良いことです。」

「殿下、午後のお茶は何にしますか？」

宮廷音楽家の卵のアルベルがセドリクに尋ねる。

アルベルも兵役で軍楽隊に所属していたので、一緒に過ごす機会も多かった。

午後はセドリクが紅茶の銘柄を指定して、アルベルがケーキやお菓子を作るのが定番になっていた。

「アルベルの作るお菓子は絶品だね。パティシエになれるよ。」

「いいえとんでもない。うちのパティシエに教えてもらってばかりです。」

「まだまだ修行中で…」

彼は謙遜するが、大好きなセドリクに褒められて上機嫌だった。

「しかし、皇帝陛下のお側で働くには、あと何年こうして修行していかないといけないのかな。」

「そうですね。自力で頑張っていますものね。」

「この間の面接の通知は不採用だったよ。」

「わざと遠ざけているんじゃないか……」

「わざと？」

「とにかく君は何も心配しなくても良いからね。宮廷ヴァイオリニ

ストの父に一度聞いてみるよ。」

「自由都市の伯爵閣下か。」

「この生活水準から発信しているのだから、そろそろ適齢期だとは想うんだ。」

セドリクもたまにはアルベルに頼ってみることにした。

「お父さま同士の付き合いが色々あるのかしら。」

「ボクのパパも幼い頃から宮廷にいるから、何かの役に立てると良いなあ。」

一方ユリウス23世ハインリヒの元には初老の将軍が訪れていた。

「セドリク王子ですが、将来が楽しみですな。」

皇帝陛下の片腕として働かれる日も近いでしょう。」

「いや、私は子供が軍隊で働く事に強く反対したのだ。」

おとなしく将軍に護られていれば良いものを、何か迷惑をかけてはいないかとヒヤヒヤしている。

私の言うことを聞かなくて困っているよ。」

ハインリヒが溜め息混じりに悩みを打ち明ける。

「そんな風には見えませんが、（父親思いに見えた。）

殿下も年頃で色々思う所があるのかも知れませんか。」

「そうか。なかなか思うようにはいかないものだ。」

セドリクが近衛兵に志願してからというもの（とは言っても彼は自分の王子を門前払いにしたのだが）、皇帝である父親の頭痛の種は更に増えるばかりであった。

それは例えるならば、常日頃自分も近衛兵に護られながら父親の身辺を護ってもらうということの難しさであった。（矛盾しているから）

娘の自立に対する配慮もしたりと、およそ皇帝らしかぬ苦勞が続いた。

「子供の考えていることは訳がわからん」

ハインリヒは頭を抱えて悩みに悩んだ。

いつしか口癖になっていいるのだから、ハインリヒがどれほど悩んだ

か窺い知れるくらいだった。

所で、近衛隊にセドリクと一緒に志願した少年がいた。レオンである。

彼は見事合格したのだ。ハインリヒが悩んだ分、遅れたが合格通知が彼の元に届く。

「色々探ってみるよ」

彼は頬杖をかいて呆然としていたセドリクを優しく慰めた。

「それと君を守ることにになったからよろしくね！殿下」

この知らせはアンスの祖父の耳に入ることになり、彼は大変複雑な心境だった。

セドリクが望むなら我が国の近衛隊に迎えるよう取り計らった。

つまりアンスの祖父はセドリクを彼の国の近衛隊に招致して技術を授けるよう手配してくれたのだった。

誘拐されたレオンを単独で救い出し、2人が実の兄妹だと知っていた元大公の判断だった。

「あいつ大丈夫かな」

ラインは遠巻きに呆れつつもセドリクを心配していたのだが。

こうして別々にだが2人は自衛に必要な技術を得ることができた。

2人が訓練を重ねる姿を見て、ハインリヒは隠居したノルトラントの大公に気を遣わせてしまったことに気付くと、自らの醜態を強く恥じるのだった。

「伯父上までセドリクを甘やかしすぎだ。放っておけば良いと思う。そのうち頭も冷えて冷静さを取り戻すだろう。」

宮廷医であるフォーデルヴァイデ侯の元で医学を学んでいたラインは呆れ気味に

侯爵の息子のルプレヒトにそう言うときつくと見据えた。

「でもノルトラントの大公殿下の適切な配慮のおかげで円満に解決したそうだから良かったじゃない。」

ルプレヒトがにこりと優雅に笑みをたたえる。

「しかし王子が近衛兵に憧れるとは……。」

「それだけど、お父上を余程尊敬していないと憧れないと想うよ？」

「……………」

2人は同時に天を仰いだ。

「お互い尊敬できる父親が欲しいものだな。」

視線が重なりルプレヒトがはにかむ。

「教皇猊下、君のお祖父様の方からはどうなの？」

その後細かく言われてはいないかい？

セドリク殿下、騎士とは言っても修道士でもあるからね。厳しい人生だね。」

「聖職者になるように。」

「ああ、やっぱり。私も今の内に身の振り方を考えておいた方が良さそうだ。」

「うちの爺さんは相変わらず口煩い。何度部屋に閉じ込められたことか。」

「天帝猊下もそれだけ孫の君に期待しているんだろうけど自宅軟禁はちょっと酷いね。」

「意にそわぬ事をして部屋に閉じ込められても窓から抜け出すがな」
ラインがにやりと笑った。

「君はお祖父様とは不仲だが、セドリク殿下は仲が良い。同じ孫なのにこの差は一体何なのだろうね。」

「そうだな。セドリクは先代皇帝にも気に入られていた。
扱いが違うのはオレが反抗的だからだろう。」

「でもセドリク殿下には君やアンセルム^{アンス}アンセイス王子や皇帝陛下の様な民衆からの支持がない。これは問題だよ。

人柄も良いのが裏目に出ているのかな。意外に政敵が多い。

考えておいた方がいい。畏れ多い事だが殿下は政治家には向いていないよ。」

「……………」

「大貴族のお気に入りだから嫉妬もあるのだろうけど、もっと民衆と共にあるべきだ。」

所で結婚相手は一体誰なのだろう……。」

「……結婚……」

「アンスとか……サミディアの王子とか……」

「……本当はお姫様だなんて民衆もなかなか受け入れられない。」

「両性で産まれてきたものは仕方がない。」

セドリクは障害児だ。」

「私達、医者には理解できるが、彼女が次の皇帝に選出されるとは……想えないよ。そんなに甘くない。」

「祖父はあれが天使だと、だから男として育てるように言っていた本人だけの責任ではない。」

「それは皇太子としてじゃない。それは教会の為に尽せという事だ。」

「彼女は騎士であり修道士だ。女性には厳しすぎる人生を自ら選んだ。」

「貴族の支持も欠かせない。大衆の支持も欠かせない。今に失脚するよ……。」

いつしかルプレヒトの目に涙が浮かんでいた。

「父は宮廷医として、ずっとこの問題に向き合ってきたけれど、殿下も成長期に入ってそのうち隠しきれなくなる。」

「いいかい、ユリウス陛下はセドリク殿下を外国に亡命させる気だった。」

出生当時は政情不安だったからね。

産まれた時から後継者にするつもりはなかったのだ！」

「まさか……」

「私の祖父が後見人を……書類もある」

そう言うところルプレヒトは書類を紐といた。

「後継者は弟のユリアン殿下だと想うよ。」

「……ユリアン……」

「兄弟で継承争いが起きると想う？」

「……セドリクの夢は父親の役に立てることだ。」

家名を汚すような事はしないだろう。

……ユリアン、フリードリヒは幼なすぎて、何とも……言えないな」
書類に目を通しながら、ラインは平静を保ちつつそう答えた。

「セドリク殿下は教会の為に生きているようなものだ……」

騎士の誇りをもって生きていくのか。これから……」

「オレとは正反対だ。」

ラインがルプレヒトに書類を返しながら言った。

ラインとルプレヒトの2人が国の将来を憂いていた頃、海を挟んで遠く離れた国では丁度政変が起こっていた。

800年続くハワード家の庭園はエデンの園を彷彿させるほど美しく色とりどりの花が咲き誇っていた。

薔薇、クレマチス、異国から送られた花菖蒲、池には錦鯉が悠々と泳いでいる。

ハワード邸に住むヘンリは薔薇の手入れをしている腹違いの兄にある日こういった。

「王制も倒れた。

士官学校に行つて、国の為に働く。兄貴の為だ。」

「私の為？」

私はお前を失いたくない。何もこんな時世に軍人にならなくても……。

「

アーサー・K・ハワード伯爵は、弟のヘンリを必死に止めた。

「両親は死んだが……オレは兄貴とは違う。貴族でもない。

いつまでも兄貴の世話にもなれないしな。」

ヘンリの決意は固かった。荷物をまとめてさっさとバスに乗ってしまふ。

アーサーもヘンリを追って軍に行った。

それほど家族を失いたくなかったのだ。

何としても引き留めておきたかった。

別居しているアーサーの母マティルダ王女の元に連絡が入る。彼女は將軍から報告を受けると首を傾げた。

「ヘンリと…」

どうもマティルダはヘンリが苦手だった。

離婚した夫の再婚相手の連れ子ということもあったのだが。

「アーサーに気を付けるようにいいなさい。ハワード家にも困ったものですね。」

彼女にしてみれば父、つまりアーサーの祖父が他国に囚われの身になったので、今はヘンリの家出事件に構っている余裕はなかった。アーサーの祖父は会談に赴いた所を隣国の独裁者に捕われてしまったのだった。

特殊部隊により幾度となく救出作戦が繰り広げられたが、未だ成功していない。

もちろんヘンリもそれを知っていて志願しに行ったようなものだった。

そんな囚われのアーサーの祖父に拾われて育てられた陸軍士官がいた。名をステイブルストン中尉という。

彼は任官してからというもの育ての親を救うべく奮闘していた。あるとき若い部隊を任される事になった。

「閣下」

ステイブルストン中尉が尋ねると、幼い頃面倒をもらった老將軍は親しげに喋り出した。

「士官候補生ばかりだが、君の指揮下に置くことにした。

今回は海を越えて光大洋の隣国へ行ってもらいたい。

新型の潜水艦で海を渡れることが判明した」

「偵察任務ですね」

「そうだ。期待している。」

こうしてステイブルストン中尉は任務に就くことになった。

一方母国ローゼルツの領地で名君の誉れ高いリーヴェ侯の娘ユリアナはある日不穏な動きを察知することになった。

皇太子への反乱。

最初それは書状だったのだが、帝室の抱える複雑な事情を知るリー

ヴェ侯は半ばそれを黙認しようとしていた。

地下の会議室を通り掛かった娘が立ち会っていたのは偶然であったが……。

正直、ユリアナにはどっちでも良かった。反乱は現実味を欠いていたし、セドリクなら切り抜けられるとも信じてもいた。

ただ、幼なじみのラインに知らせた方が良いと判断した。折りを見て帝都に向かう。

表向きは平静を保って帝都に向かうきつかけを伺っていた。

南エーデルラント王国にある帝都ローゼンでは君主が頭を悩ませていた。

どうも最近感情的で良くない。昔とは人が変わったようにセドリクに接してしまう。

明らかにハインリヒは感情をセーブできなくなっていた。

異常性に気付いたフォーデルバイデ侯は孫のルプレヒトにそつと打ち明けた。

「ユリウス陛下がですか？」

ルプレヒトがまたかといった表情で祖父を見る。

「私は陛下の侍医として見過ごすことはできません。ルー、万一の時はセドリク様を頼んだぞ。」

私も持病を抱えてはもう先は長くはない。この国の行く末だけが心配じゃ。」

「心得ております、御祖父様。ですが、何故、セドリク様だけにそのような態度を取られるのでしょうか。弟のユリアン様との扱いはまるで違う……」

「これは精神疾患ではないのだ。何か異質なチカラで遠ざけておられる。ユリウス陛下はセドリク様を後継者として認めたくないあまりに」

心のたがが外れたようにならせられた。人の心に魔が棲んでおる。」

「御祖父様らしくありません。いったいどうされたのか……」

ルプレヒトは非科学的な祖父の言動に呆れた。

「そんな目で私を見ないでくれルー。」

「すみません御祖父様。ですが、仮に先程の話、ユリアン様を後継者にされるのであれば、大貴族の支持を失うことになるのではないのでしょうか。」

国内外の有力な諸侯から愛されているセドリク様をむやみに皇太子の座から追うとなると、普通は反対されます。

確かにセドリク殿下は今はお子様でそれを隠されておりますが、そう決められたのは陛下なのではなかったのですか？」

「だが現実には追放しようとなさっておられるよ。むろん理論的にはない。このままでは王位を巡って兄弟喧嘩にならないか不安で仕方がない。はては皇帝の座を争うかも知れぬ。」

「……では、万一のことがあれば私がセドリク殿下にお仕えします。そうならないよう尽力いたします。それでいいですね？」

「うむ。くれぐれも注意してくれ。」

「……はい。」

争いごとのない楽園に見える国で不穏な空気が漂い始めていた。

皇帝の心の中に魔が棲んでいるという。

現実ならば、大変なことだった。

だが、日に日にハインリヒ（ユリウス23世）はセドリクを遠ざけるようになった。

父親に愛されたいセドリクにとっては心が休まらない日々が続いた。何がおかしいということではない。

王妃テレーゼはリーザ（セドリク）を心配そうに見つめ、度々ハインリヒにもっと優しくと進言したが、

妻も夫の尋常ならざる異変に気付いていた。

だが、テレーゼは愛するリーザに優しくするだけで、現状はこれといって改善されなかった。

「お母さま……あなたに愛されておきながら、父親の愛が欲しい等、わたしは贅沢ですか？」

ある日、耐え兼ねてセドリクがテレゼに尋ねた。

「あなたは男の子として育てたし、父親に理想を求めるのは自然なことよ。リーザ……あなたには女の子としての名前もつけたけど、本当はどちらがいいの？」

「……………わたしは王子です。王女だと思ったことはありません。」

「……………拗ねないで。」

「すみません。意に沿わぬ子供で。そんなわたしではお父さまのお役に立てませんね。」

「……………リーザ……」

「お母さまはわたしに何をお求めですか？」

「王子らしく？」

「私は女の子のあなたが心配なのよ。本当ならばすぐ国外で平和に暮らせると思っていたわ。」

「わたしには守護すべき民がいます。祖国を見捨てたりはしません。騎士として、それが誇りです。」

「……………」

「わたしの命の心配をされていたのですね。心よりも。」

拗ねたセドリクにテレゼは反論できなかった。

そんな渴いたセドリクの心を慰めるのは、幼なじみのレオンだった。ふたりは毎日よく遊んだ。

子供の頃からずっと。

彼は15歳になったセドリクにある日ドレスを贈ったことがあって、セドリクを驚かせた。

「君は女の子だよ。母上も君を女の子だと思っている。これを渡すように頼まれたから今日はここに来たよ。」

優しく微笑んでレオンが言う。

「僕は男の子の方が良かったよ。」

父親のことが脳裏をかすめたのか落胆したセドリクにレオンが続けて言う。

「君が困った時は僕は飛んでいって助けてあげるよ。今までもこれ

からもずっと。」

「ふうん……別に君の助けなんていらないけどね、ありがとう。」
「どういたしまして」

レオンはにこにこしていた。

スティブルストン中尉が軍港から学徒動員された士官候補生と共に海軍の新型潜水艦に乗り込んで1日が過ぎた。

「まもなくフィールドバリア区域にさしかかる」

ブリッジで艦長がスティブルストン中尉に説明した。

「海中なら航行可能とうかがいましたが大丈夫のようですね」

「そのようだ。」

スティブルストン中尉、準備は万端だな？

中尉達はカッターで上陸してもらう」

初めて航行する海域に冷や汗まじりに艦長が語りかけた。

「ハッ、いつでも上陸できます大佐」

部下が通信ブイを巻き上げると、上陸作戦を開始した。

ゆるやかで静かな海岸線を見つけると小型の上陸艇で砂浜にあがった。

人数にして僅か12名。

ローゼルツ海軍の監視の目を盗んで砂浜を走って行った。

明くる朝、フィロソフィアと同じ影大洋の軍事国家アルメリアの軍隊が上陸したのを知ったのは、彼らが月明かりの絨毯の森と呼ばれるスズランの咲く森を進軍していた時だった。

彼らは森の中で放置されていた古い城を要塞がわりにしている最中だった。

古城に案内されるとアルメリアの女性士官の居るテントに案内された。

「私はアリシア・デ・コルトですね。階級は少佐。坊やの名前は？
かたくならんでも私はあんたらを食ったりはしやんで？」
赤い巻き髪の女性士官は軽やかに言った。

「ステイブルストン中尉です。」

名前はハーディン・イグレット・ステイブルストンです。」

「ほう…東方系とのミックスばいね。よろしゅうに。」

デ・コルト少佐の気さくな態度に士官候補生達の表情も緩んだ。

しかしステイブルストン中尉の表情は堅いままだ。

「ふうん…軍部の事情でも知っているみたいやね。」

アリシアが探りをいれる。

「自分は今回の任務前には国王陛下の救出作戦に加わっていましたが陛下を拉致したあなた方の軍隊を許す気はありません。」

たとえ、今は共同戦線をはっていると知っても簡単には許せませんよ。」

「たしかにあんたらの議会を脅してはいる。」

「この森は深いし広大や、あんたらが迷わんとも限らへん。」

ここの言語もはつきりせえへんし…このまま子供だけで行かせるのは気がかりや」

「ハーディン先輩…せっかくの好意ですから受け取っておきましょうよ。」

士官候補生の1人が情けない声を出した。

「しかしだな…陛下は彼女らの軍の支配下にあるし、彼女らの目的もはつきりしない。簡単に従えるか！」

ステイブルストン中尉は拳を震わせた。

「忠誠心篤いんやね。うらやましいわ。」

でも、偵察任務って情報をこっちは握っとるんやけどな。」

「……議会も我が軍部も屈したのですか？」

「そのようやね。おまけに、上はこの国も制圧しておかんと気がすまんらしいで。」

そのための任務やったんちゃう？」

「……………あなた方は戦争をしにこの国へ？」

「そうや。もう戦争は水面下で始まっとるんやで。」

兵器の質は圧倒的にこちらの方が優位やからこの国が降伏するのも

時間の問題なんやとちゃう？

実際うちらは空軍の爆撃を待つくらいやよ。

やからうちらが何とかしてフィールドバリアを解除せんとな」

「フィロソフィア軍上層部が本当に、アルメリア軍と遠征を？」

士官候補生の1人ハワード伯爵アーサーが尋ねた。

「フィロソフィア王国の軍だけやあらへん。フィロソフィアの属領
やったフェアディール連邦軍もや。上は密約を交わしとるんやで。」

「馬鹿な……………」

アーサーは頭を抱えた。

「あんたらが、この森で迷つとる間に情勢はいろいろ変わつとると
ゆう事をまず知っておいた方がいいね」

「……………もしかして、あらかじめ分かっている上はハーディン・ステ
イブルストン先輩をこの国へ行くように手配させていたんじゃない
ですか？」

マリン・スナイパーの役をしていたヘンリ・ジュン・ハワードが訝
しんだ。

「確かに私達3人は国王陛下ゆかりの者だが……………」

顎に指をあてて考え込むハワード伯爵に異母弟のヘンリが

「オレは違うぞ兄貴」

と、付け加えた。

「じゃあ、あんたら、これからどうするつもりなん？」

本国からの命令を待つわけやろ？

でも、どのみちやることは一緒やと思うんやけどなあ……………」

アリシアは困った様子で少年たち生徒を見ていた。

その時、フィロソフィア軍から司令書が届いた。伝令将校は丁寧に
アルメリア軍人に敬礼した。

中尉は頭が痛くなった。

おまけにフィロソフィア軍が到着するまでアリシアさんに同行せよ
という内容だったからだ。

「ただ、この国の言葉が分からないのがネックですよ、先輩」

「それが何とかなるかもしれん」

「何とかなるんならええんやけど、何かええテでもあるん？」

「……自分はこの国の言葉……聞き覚えがあるのですよ。」

多分、自分が無くした記憶だと想います」

「記憶喪失だったんすか先輩！」

「……子供の頃、浜辺で陛下に拾われる前の記憶がないだけで、日常生活に問題はないからな」

「でもビックリしますよ」

「ほんまかいな……あんたらほんまに大丈夫？」

「大丈夫、通訳くらいなら出来ますよ」

中尉はしっかりと口調で言った。

「ならええんやけどお」

張り切って国を出てきたのに現実は一筋の毛も無い。ステイブルストーン中尉は思った。

一刻も早く育ての親の救出作戦に復帰したいのに、新しく戦争を始める準備を進めなくてはいけないとは……。

そんなこんなであつという間に1日は過ぎていき、彼らはアリシアが占領している古城に泊まることになった。

異変に気付いたこの古城の主であるディートリッヒ神父（ラインの弟）が父王ジークフリート25世に早馬を飛ばしたのは、これより2日後であつた。

ディート神父とテンブル騎士は勇敢に戦ったが、

近代兵器の前に、特に機銃掃射の前に馬を狙い撃たれて敗走せざるを得なかった。

ジークフリート25世とラインハルト王子はただちに軍を編成して霧深い森に足を踏み入れた。

「賊め……ディートが庭の手入れに戻らなければ気がつかないところだつたわ」

ジークフリート25世が不安げに次男ラインハルトに話しかけた。

「心配しなくてもオレがいれば大丈夫だ父上。

オレの神聖魔導を占領軍に見せてやる」「それは頼もしいが、封印された古代兵器を手にしていたと聞くぞ。

それに私はお前に皇帝の元へ一刻も早く向かってほしいのだが」

「父上の身に万一のことがあったら叔母上が悲しむからだ。

テレーゼ叔母上が皇后だというのにまったく父上は…」

「セドリクは心配ではないのか？

お前のことだ、あの城が狙われる前に、妹の子であるセドリクが狙われんとも限らん」

「セドリクも神聖魔導を使う騎士だ。

賊を追い払ってからでも遅くはない！」

アルメリア軍と交戦するとラインはまず風を制した。

不思議な風で弾丸が発射されてもバラバラと落ちてしまつ。

しかしそれにも限度があつて、兵士全員を庇いきれない。

陣形を辛うじて保てる程度だった。

籠城する敵に決定打を浴びせられない。

しかも砲弾の雨を防ぎきれず、善戦するものの大局を制することが出来なかった。

「こちらでも封印された兵器を再開発せねばなるまいな…

もうよかるう。お前は皇帝のもとへ行つてハインリヒに兵器の封印を一時的に解くように言つてきてくれ」

「ちっ！オレー人なら何とかなるのだが……父上、無事でいてくれ。お前たちは父上の周りを術で固めろ」

配下の兵に指示をとばすと馬を帝都ローゼンに向けた。

前線の混乱に乗じて反乱が起きたのはその頃だった。

反乱軍は民間人を盾にセドリクを捕まえると皇太子の座を退くよう要求した。

セドリクは要求はそれだけですか？

と言うと、あっさり応じる構えを見せた。

近衛士官のレオンがそれは出来ないと言つたのだが、

わたしの務めは市民を護ることだ。

無論、次の皇太子を決めるのは皇帝陛下ご自身であって彼らではないと毅然として言った。

それを聞いた天帝カリクトウスが激怒して、皇帝ユリウスに軍を出すよう迫った。

「あれははじめから皇太子にするつもりなど私にはなかった。

義父上が皇太子にしたようなものではなかったか？」

ユリウス23世ハインリヒが冷淡に言う。と教皇カリクトウスはますます怒り出して自らの私兵を送り出すと共に

近隣の諸侯、特にノルトラントやルーヴィル、フォーデルウ、アイデの各選帝侯に軍の派遣を命じた。

彼らが救出の軍を編成していると、解放されたが怪我をしているセドリクが戻ってきたので、カリクトウスは怒りに任せて

大馬鹿者と罵倒した。

セドリクはかえって落ち着いていて、

畏れながら市民を守護するのが第一の使命でございます。

無用な争いはどうかおやめくださいと進言した。

北エーデルラントの王太子ラインが帝都ローゼンにやってきたのはそのような微妙な情勢下であった。

セドリク！お前らしいとラインが腹を抱えて笑うので、ますます頭に血がのぼった祖父カリクトウスはラインを錫で殴った。

ラインがこんなことをしている場合ではないと我に返ると選帝侯や天帝、皇帝の居る前で封印兵器の一時解除を提案した父王の親書を渡した。

甥のラインからユリウス23世ハインリヒのもとに親書が手渡されると、

事態を重くみた皇帝は条件付きで承諾した。

そういった経緯で古代兵器群の氷山の一角が日の目を見ることになったのだが、開発期間が短く、また間に合わなかった。

全軍に配備するよりも早く竜騎士団を誇るノルトラントの王は和平

調印に出向いた所を暗殺され、また帝都ローゼンはノルトラントの制圧によって制空権を失い包囲された。

エーデルラントの言語が分かる者として、ステイブルストン中尉が最後通牒に現れた。

「ステイブルストン中尉と申します、皇帝陛下」

「敵ながら天晴れといったところか…」

ハインリヒにいつもの覇気はない。

「フィロソフィア、フェアディール、アルメリアの空軍が帝都を包囲しています。」

降伏いただけない場合は帝都を絨毯爆撃します。

陛下、どうか無用な流血は回避していただきたい」

ステイブルストン中尉が叔父に話しかけると、ハインリヒは悟ったかのように片手をあげて玉座から段をおりてきた。

「いつかこのような日が来ると想っていたよハーディン」

「は？」

突然名前を呼ばれてステイブルストン中尉が困惑した。

「いったいどこの賊と思えば甥の軍だったとは…」

誘拐されてつきり死んでいたものと想っていたが、よく帰ってきたな。」

「はい？」

「どうした？」

…聞けば、弟のディートリッヒ神父を負かせたらしいな

てつきり賊かと思えば、北エーデルラントの正当な王位継承者ではないか」

「王位継承者？」

「ふむ…恐怖で記憶をなくしたか？」

自分のおかれた立場をよく理解していないと見える」

「いえ、自分は、任務で参ったわけでありませう。皇帝陛下。」

「任務…か。良からう、いづれは君のものになるかもしれぬ国だ。統治するいい機会になるだろう。」

こうしてあっけなく戦いは幕を閉じたかに見えたが、南エーデルラントの王で皇帝であったハインリヒは、妻のテレエと養子のユリアン・フリードリヒをいち早く国外に逃すべく古代兵器ヘリコプターに乗せたばかりだったので、どこか安堵していた。

帝国は占領軍によって瓦解するかもしれないが、いつれ復権出来る日も来るだろう　と。

もともと帝国内外の反乱軍によってヘリコプターが撃墜されたのを知ったのは占領軍に後事を委ねた後であつたが…。

レオンに連れられてセドリクが城の地下水道を歩いていたのはハインリヒがステイブルストン中尉と話していた頃だった。

「……まさか僕が逃げ出すことになるとはね。覚えていろよレオン。」

「解放軍を組織して戻つて来るまでの辛抱だよリーザ。」

君は怪我人だから、当分は無茶させないけどね」

レオンと一緒になので、どこか空気は明るい。

「やるべきことはたくさんあるな。まあ、お前となら出来そうな気がするよ。」

地下水道から、月明かりの絨毯の森に出る。

「月明かりでスズランが綺麗だねリーザ。」

「綺麗だけど、きな臭くないか？」

「そういえば…」

「遠くで爆発した……」

警戒しながら爆発地点に向かうと帝室の紋章が施されたヘリコプターが墜落して炎上していた。

「みんな死んでる……」

「お母さま！」

「えっ?!」

レオンが振り向くとセドリクが声を上げて泣いていた。

スズランの…聖母の涙の花だけが月明かりの向こうを悲しく照らし

ていた。

セドリクは埋葬するとき、母から貰ったイヤリングの片方を外して母テレーゼの耳につけてあげた。

天国への階段と呼ばれるスズランの花束と一緒に。

「きつと祖国を守って死んだんだ……」

レオンはそんなセドリクを慰めた。

* 第1部第2章 *

レオンは疲れきった様子のセドリクを船に乗せると、横にならせた。

「お母さまの為に今まで頑張ってこれたのに……」

セドリクの疲れが激しいからだ。

「君は怪我人なんだからね。ユリアンのことも考えるのは今はやめよう……どうしようもなかったんだ……」

「……………うん……………」

セドリクは力ない。

レオンは海を越えてローバーン王国につくと、まずセドリクに普通の生活をさせるように心がけた。

解放軍の結成は無理かもしれないと思いながらも胸中はセドリクだけでも無事で良かったと考えていた。

セドリクの具合がすっかり良くなって、生活費が足りなくなってくると、セドリクは近くの学校で働きだした。

その頃になると、この国もフィロソフィアの軍に対抗できなくなりつつあり、

ローバーンの王子に加勢するべく、ローゼルス帝国の北方最大の領邦国家のひとつであったノルトラント王国の

王子アンセイス・アンセルムス・ファレンティーンが当地で解放軍を組織した。

竜騎士の彼は竜騎士団を再編成してフィロソフィア軍に対抗した。

優秀なドラゴンはその羽で数々の攻撃を無効化して一定の戦果をあげていた。

「アンスが来ているのね」

すっかり女口調になれた感じのセドリクが休日のお茶の時間に新聞を見せて言った。

「行ってみるかい？リーザ」

「……………悪くないけど、この普通の暮らしもすてがたいわ。

なんてね。冗談よ。

アンスが頑張っているのなら、さりげなく応援に行ってあげるのが親友のつとめよ」

「そういうと想ったよ。でも今度こそ君は無理しちゃダメだよ。

王様も無茶は望んでいないからね。」雪の降る中2人は皆に向かった。

「よっ！

お前から生きてたのか。悪運強えな！リストからもれて行方不明だったからずっと探していたんだぜ？」

アンス王子が笑って出迎えた。

「ここはノルトラントの軍人が多いから、エーデルラントの宮廷にいたような時のギチギチした空気はないぜ。安心して過ごせよな。武器は…持っているみたいだな。

聖遺物を二つも持ち出すなんてすっかりしているよな！」

セドリクの持つ聖なる大剣ロザリオ・ディレクタフォンと、レオンの持つ聖剣オーカーを確認するとアンスが笑った。

「そうそうアルベルもいるんだぜ？」

アンスがアルベルの部屋に案内する。

アルベルはオルガンを弾く手を止めると「良かった！よくぞご無事で！」

とセドリクの無事を泣いて喜んだ。

「アルベルは泣き虫ですね」

セドリクがからかうとアルベルは、これは喜んでいるんですとムキ

になって反論した。

それはそうだ。アルベルにとってセドリクは最愛のひとなのだから。アンスは従弟のアルベルの心の内を思い出した。

この知らせは瞬く間に国王夫妻と王子達の耳にはいることになり、セドリクと従兄のレオンハルト王子の無事を心から喜んだ。

ローバーン王国の南にあるサミディア王国の王ラルスはこの知らせを聞くと直ちにセドリクに援軍を送ることを決めた。

サミディア王室とローゼルツ帝室と南エーデルラント王室は先祖を同じくしていて、現在も親交が深かったのだ。

（訳注：小説版と漫画版の第1部第1章終了間際でセドリクはレオンがハーディンの追っ手から庇った際に生き別れており、レオンはエーデルラント地方にとどまっていた。

この為、第1部第2章冒頭では放心状態のセドリクと記憶喪失のハーディンが細かく描かれたのだが当作品では省いている。

この作品を500ページに編集出来るか疑わしいので、当作品はハイライト版の性格が強い。）

解放軍の志気があがっていた頃、ステイブルストン大尉は帝都ローゼンの執務室に自身の弟だというラインハルト王子を招いていた。

「検査の結果が出た」

「そうか」

「間違いなくあなたはオレの兄だ。遺伝子情報が兄のものと同じだったそうだ。」

「にわかには君が弟だとも信じられないがな……」

「従妹のセドリクは覚えていないのか？」

「小さい頃兄上がいつも面倒をみていた」

「セドリクの名前は聞き覚えがあるが……すまないな……そこまで記憶は回復していない。」

「まあ、焦ることなんてないよな」

腰に手をあてて喋っていたラインが腕を組んで笑うと机の上の書類を見た。ラインが笑うのは珍しいのだが、

それも覚えていないハーディンは当たり障りのない範囲で説明した。
「元老院を再編して議会を作らないといけないんだ。

この国は今まで専制政治だったのによく今まで統治してこれたな。
驚異にあたいする」

「古い議会政治はセドリクが興味を持っていたな。

あいつはオレと違って政治家になるつもりだったみたいだから」

「…セドリク王子と従兄のレオン王子が生きていたそうだ」ステイブルストン大尉がラインにそう告げた。

「2人が陥落のどさくさに紛れて逃げたのは知っている。

セドリクは怪我をしていたが元気になったみたいだな。」

「解放軍を組織していると言うことは？」

「そこまでは知らない。アンス達と合流したか。」

「私は近いうちにローバーンに行くことが決まっているが、君はどうするつもりだね？」

君さえよければ一緒に来てくれて構わないそうだ。

医師は不足しているから…」

「たしかにここにいてもろくなことは無いだろうな。

退屈しているから、ついて行ってやってもいい」

「セドリク王子に会えることもあるだろう。

無論、君が解放軍に荷担しないのが前提だがね。

ハインリヒさんも来るそうだ。」

「叔父上も？」

「向こうで会談を予定しているから、それで来られるそうだ。」

「会談をしにローバーンへ？」

「実はセドリク王子が先日の我が軍との交戦中に王室の血をひくパールバラの伯爵アーサー・ケネス・ハワードを怪我させたそうだ。

彼は私の部下だね。落馬した際に頭を強く打って意識がない。

王室の方もお越しあそばせる」

「……会談には興味が無いが…オレにいったい何をしろと？」

「伯爵を診てほしい。伯爵が回復したら両王家も和解できるだろう」

「仕方がない。セドリックも余計な仕事を寄越すものだ……。」
ラインはしぶしぶ了承した。

「では至急荷物を纏めてくれ。早速ローバーンのアーサー・ハワード伯爵のもとに飛んでもらう」

ホーエンツェザー家の兄弟は空路ローバーンへ向かうとハイデルベルク城へ急行した。

ここが会談の舞台に選ばれたからだ。

今回の会談ではちゃんとエーデルラントの宮宰も招かれていて、占領計画が順調なのを影大洋三国の高官たちがアピールする目的もあった。

会談というよりは各国首脳の密談に近かったのだが、一定の和平交渉が行われた。

アンス・フアレんティーン王子達の解放軍とフィロソフィア軍が特に制空権をめぐって熾烈な戦闘を繰り返していたのだが、

和平交渉の為、一時休戦となった。

和平案はかねてから検討に検討を重ねて周到に準備されていたのだが、フィロソフィア王の孫アーサー・ハワード伯爵がセドリックとの一騎打ちで意識不明の重傷に陥ったことにより予定より早められることになった。

ハワード伯爵の異母弟ヘンリは異母兄の仇を討とうとしていたのでセドリックと話すことなど何もないといまいます。言いなつと、和平交渉よりも寧ろセドリック王子暗殺計画の方に共鳴していた。

その為、和平交渉にはハワード家のバルバラ伯爵アーサーの母マティルダ王女が赴くことになった。

豪雪地方のハイデルベルク、一月の寒い日に各国首脳は一同にかいした。

「前の和平交渉では父ちゃんが暗殺されたんだが、今回はまともに行えそうだな」

アンスが机の上でペンを回しているとマティルダ王女が話しかけて来た。

「先代ノルトラント大公のお悔やみを申し上げます。
ファレンティーン王子にはご迷惑をおかけしましたね」

「戦争の虚しさを痛感しただけだ。謝ってもらって父が帰ってくるわけではない」

そう返答するに留めた。

「あれは事故だと聞く」

アルメリアの大臣が重い口をひらいた。

「…それについて論議をしにきたわけではあるまい」

皇帝の座を追われたハインリヒが両者を窺めた。

「色んな者が死んだ。」

ハインリヒの妻と三男も殺された。

王侯貴族から本来殺戮の対象外であるべき非戦闘員までな…」

サミディア王ラルスの口調も重い。

「わらわの息子もいまだ昏睡から覚めぬ…」。

これ以上の犠牲者を出さぬ為にみな参ったのです！」

マティルダ王女はそう発言すると場は静粛になった。

マティルダ王女は盲目と聞く。月夜の姫と呼ばれた女性だ。そうい

った囁きが交わされた。

「ノルトラントは今、どうなっているんだ？」

アンス・ファレンティーンがマティルダに尋ねた。

「かの地は先代大公グスタフ殿が治められています」

「そうか」

じーちゃんが、とアンスは心の中で付け加えた。

「本日は伯爵の異母弟君が来るとうかがっていたのですが…いかがなさいましたか？」

渦中のセドリクが礼儀を重んじながらフィロソフィアの武官に尋ねた。

「セドリク、彼は来ない」

武官のひとり、ハーディン・ステイブルストン大尉がスマートに返答した。

「そうですか：教えてくれて感謝します」

「ヘンリ・ジュン・ハワードには気をつけなさい。セドリック王子。彼はあなたを恨んでいます」

「心にとめておきます」

ところで、とローバーン王が切り出した。

何故休戦の申し入れを？

「そもそも我が国はアルメリアの支配下にあり、これ以上、王家からの犠牲者を出さないためです」

マティルダ王女は難しい表情で説明した。

「確かに無益な戦が多かったが、ずいぶんと弱腰ではないか王女よ」

「国王陛下は戦を好みません。今回の事に頭を悩ませておいでです。私はせめて、娘としてのつとめを果たしたいのです」

「そうであつたか……」

会談は平行線を辿つたが、マティルダはこの話とは別に内密にだがエーデルラントの返還問題に言及した。

時期が来たらハインリヒに国を返すと言うのだ。

そのかわり、フィロソフィアとフェアディールには攻め込まないでほしいと告げた。

「あの戦いはなんだつたんだ。クソッ！」

アンスの怒りはやり場がなかった。

「わたしだって！」

怒りの矛先にあつたセドリックが本音を言った。

伯爵アーサーをフィロソフィア軍に引き渡すと、ラインは神聖魔法で回復するかどうか試みた。

効果は数力月してからあらわれて、アーサーは目を覚ました。

ヘンリはラインに礼を言うと言った。アーサーの回復を心から喜んだ。

そうして月日は流れ春になったころ、ステイブルストン少佐の加わる国王救出作戦はようやく成功し、

やがて彼らは国に帰ることになった。

解放軍がエーデルラントに凱旋帰国した時、ノルトラントの鉄拳大

公グスタフはセドリクとレオン、ハインリヒに真実を告げた。

真実を告げる前に帰って来てくれて良かったと言ったが、セドリクとレオンはシヨックを受けた。

レオンはセドリクに淡い恋心を抱いていたと言うと、セドリクは馬鹿だなと言って諦めた。

レオンはしばらく空気が抜けたようになっていたが、いつしかセドリクの姿が見えないので、あちこち探した。

エーデルラントの遅い春、春の女神オスターラの花スズランが、月明かりの絨毯の森に咲く頃…。

ステイブルストン少佐の帰国の際に、ハーディン・ステイブルストン少佐にセドリクはひとことこう告げた。

「ついでく」

第1部 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6003z/>

EIN GLANZ

2011年12月21日22時52分発行